

月刊

駒場唯一のコミュニティマガジン

小恒河沙



評論

ロシアのハロルド

○今、再び東大を問う

NO.

6

茉莉

言頭卷



駒場の構内を歩きながらふと空を見上げて驚いた。空がすっ

ごく青いのだ。吸い込まれそうな青空を見上げながら嬉しくな
つてきて知らずに口許がほころんできた。自分の心まで洗われ
た気分だ。登山する人は重い荷を背負い山道を登っている時でも、
山道にかわいい花が風にゆれてるのを見ると苦しさも忘れて嬉
しくなってしまうのだと言う。人は美しいものを見た時には涙
なんて流さないと思う。嬉しくなるのだ。そしてその美しい物
に接吻したくなり自分がすごくいとおしく大切なものと思えて
きてこの世界全体を大好きになり祝福するものだと思う。この
事は人間の美しさについても言えると思う。みんなが他の人の
美しさを感じとれたら自分もこの世もすごく大切な愛すべき物
に見えてくるだろう。そうならすばらしいと思う。大教室
で隣に座った人にも話かけてみてはどうだろう。人間のすば
らしさをみつけだせるかもしれない。青空や花のように。

もくじ

木巻頭言 1

今再び東大を問う

第三部

■ 『恒河沙』が誰も読んでくれない

この問題にこだわるのは何故か(編集部)

■ 叛乱と牢獄 (M君の手記)

■ 文闘争のオモロサに関してー5・18学大のことなど

(文学部学友会委員有志)

■ 文学部の動き・事実経過及び資料 —— (編集部)

■ 東大をめぐる雑感 岸本修

■ 大学解体とボク(ニセ学生) 村岡正樹

■ 人物クローズアップー駒場の駅員、野口さん

■ 前号特集『女の子』への反響

■ 戯言 P女の異端児

4

5

12

13

15

18

20

22

23

コラム 時代錯誤家「書く事と考える事」

コケムシ考 宇野はるか

十把一絡に見ないでII「民青」「過激派」「原理」について

公卿鬼寿(くぎょうおにとし)

中央志向考 コンポラリフト

「女の子」論と「恋愛」論 鎌田裕

白昼夢 P女の異端児の兄

映画評論 「欲望」——「不在」と「異和」の映像 宮台真司

書評 「鳥と人間」 自然の美へのアプローチ 水島寒月

サークル紹介 亀有セツルメント

文芸評論 ロシアのハロルド 迫田英典

「知らぬ悲劇」を追う者たち

私の主張 学館拡大へ向けて 関口真哉

懸賞つき 奇怪 夕日スワードゆるブル—56 前号解答—23

54 43 42 41 38 36 34 32 30 27 26

を追う 改め

び東大を問う



改題してはどうか

ぜひ読んで下さい。これがまずいいということなんです。少しおかしいかもしれないけど。今まで「文学部問題を追う」と題して、へ第一部へ第二部へと、文学部の一連の動きに注目してきました。もちろんそれ以前からも。でも、読者（＝執筆者）であってほしいという思い、てるんですがしに聞いてみると、あまり読んでいないという答えが多く返ってくるようです。今回編集部では、なぜこの問題をとり上げるかを、まとめてみました。ぜひあなたに読んでもらって、編集部の考えをわかってほしいと思います。

題を変えたのは、国産車のモデルチェンジのように、最新売れないようだから、ちょっと変えれば目新しくなって売れるようになるかも知れないなどと、さもしい考えで断じてありません。そうだ、断じてないのだ。

この問題を考えていくと、それがひとり文学部の問題ではなく、又、文有志と民権の争いでもなく、東大全体につながる根柢は、きりしてきたからです。そしてその問題が、とりたてて

文学部問題

今、再

第三部

今、始まったわけではなく、東大の体質のなかにまで入り込んだ大きな問題のように思えてきたからです。それに対して、「文学部問題」という呼び方は、問題を矮小化するように思えたのです。

ぜひ読んで、そして感想や意見を送ってほしい。「恒河沙」では読者の、あなたの声をまっています。そしてもし興味を感じたら、関連文献を読んで、あなたなりに考えてほしいのです。そして、できれば何かをやってほしい。参考文献として、折原 若氏の「東京

大学」ほか一連の著作、宇井 純氏・生越 忠氏共著「大学解体論」をあげておきます。

「恒河沙」が誰も読んでくれない

編集部

この問題にはあるのは何故か

□ 無関心は正常だ

「え、百年祭？文学部問題……？アア、本郷でゴタゴタやつてろアレのこと。マアいいんじゃない。あんまり関心ないなあ。」

駒場生の諸君、あなた方の文学部問題に対する反応は、大方こんなものではないだろうか。かくいう「恒河沙」編集部も、何のかのといばったようなことをいうけど、感覚的には、たいして違わないようだ。案外、それは正常な感覚なのかもしれない

い。もち論、「正常な」というのは、ごく限定された意味での話だが、つまり、「私たちの置かれた現状では」という意味で、実際の話、駒場にいろど、情報が極めて乏しい。実際、今正面に立ちて頑張っている、文有志・文学研究会（背後には、いうま

でもなく文学部生の大きな支持がある。この主張にしても、「寡金反対」「今道糾弾」といったスローガン程度のものしか入ってこない。「暴力集団」といったイメージが流布されていることも見逃せない。私たちの多くは、そういうものに対して、「見がら、聞かざれ、言わざれ」の知らないことは当然「しゃべれない」で当然と考えているわけだ。

もっともこの問題を考えたり、彼らのいっていることや行動を正しく「わかる」ためには、10年も前の東大闘争による問題提起及び意義を理解していなければならぬわけだが、「学園紛争」とか「全共闘」とかいう言葉が、すでに死語になってる以上、それすら困難のように見える。

つまりとてよく知らないのだ。(何せ編集部でも、全共闘かどうのなんぞことを考えるは約ワン名で、はっきり書こうとする「〇」という数字が4つつくので、ハッキリ書かない)知らないことには関心が持てない。これはごく当り前のことだ。こういう意味で「文学部無関心派」は正常だ。

□ 「ひびく」とい

けれども違った角度から眺めてみよう。「現代若者論」とか言って、中年のオッサン達が、私たち若者のことを「他人のこと

に無関心」だとか「三無主義・四無主義の風潮」だとか言うのが大はやりのようだ。(何しろあの『世界』でオッサン若者論を特集すると、アツという間に売り切れてしまっただ)いじけた見方をすれば、そんな風潮を作った本陣は彼らではないか、ということにもなるが、それでも、やはりその言葉に対して、私たちの内にびびき合うものがあることは確かだろう。そういう自分に、何か後ろめたさを感じつつも、「ままだ」と居直って生きていくのが普通の人はないだろうか。

文学部問題でも、いくら文学部の学生が逮捕されても、処文されても、「ひとごと」でおしまい。という態度を取ってしまったというところは、たとえ「そんなことは知らなかった」といったところで、それは私たち一人一人の根本的であり方と関わっているのではないか。つまり、知ろうとさえしていないのではないか、ということに注意を向けよう。

問題はそれだけではない。「ひとごとは知らないよ」という態度が良くないのは誰だってわかると思うが、それで「ままだ」と居直って、本当にことが済んでしまっただ、ということだ。つまり、ひょっとしたら「ひとごと」では済まないかもしれないということなのだ。

「ひとごとは知らない」ではダメだ。

と言葉でいったところで、空振りには終わってしまうのがオチだろう。一定の社会状況に限定され、規格化されたオリジナリティに乏しいものであつても、私たちは「自分の根本的あり方」という幻想にしがみつくことを変えられるのは、道徳家のお説教ではなく、一定の強烈なをもった体験しかない。

ところが自分のこと、つまりあなた自身のこととなると、話は違ってくるのだ。

□ 自分のこととして

そう、「恒河沙」があなたに断えたいのは、この問題が正にあなた自身の問題だということなのだ。具体的にいえば、「東大生としてのあなたの問題」ということになる。

では、なぜあなたに関わりがあることなんだらう。それはいうまでもなく、あなたが東大生であるからだし、文学部における一連の動きが、その、東大のあり方そのものに疑問を投げかけるものだったからだ。

もつ一度言おう。今、あなた自身の足もとが、その存在を問いただされてるのだ。たとえば、はじめのうち、文学部学生院生有志の人たちの問題意識が「企業献金はイカン」程度のものであったにせよ、彼らの鉾先は東大の本質に向けられていたといえ

るし、今やそこには、「反東大」「大学解体」のイデオロギがはつきり打ち出されているのである。(もちろんそれは、民青系の人達がいうような物理的破壊ではなく、既存の大学を制度的に解体し、そのありうべき姿を模索するという意味である)東大の存在そのものが問われているのだ。つまり東大に属する一人としてのあなたの存在価値が問われている。

それは私たちに次のようなことを提起している。

「もし私たちが、東大生として何もやらずに卒業し、自らの立場に無批判なまま社会に出て行つたとしたら、それはどういう意味をもつのか。」

このように考えると、もはや「ひとごと」ではないはずだが、それでも「俺のどこが間違っているっていうんだ。東大のどこが悪い」とか、「文学部の人たちが何言っているか全然知らないの」という人たちもいるだろう。その人達に端的な例をあげておこう。今年の2月14日、東大の構内に機動隊が導入されたことくらい御存知だろう。その際3人の学生が逮捕された事も、又、「学問の自由」「大学自治」という言葉を知らないほど無知ではあるまい。

そして少なくとも、10項目確認書をもって、東大闘争の勝利を語る人なら、その第五項くらいは知っているだろう。「恒河沙

「第4号」文学部問題を追う」第一部参照。この事実が、東大闘争から10年、東大がまったく変わらなかつたこと。「大学自治」が今だに「教授会の自治」であり、その「自治」は、大学構内に機動隊を導入し、学生を逮捕させるような自治だということ証明している。え、何だ、そんなことすら知らないって。それじゃまず、知るところからはじめろしかなきゃない。

□ 私たちの位置

それでは、文学部の人たちが問いかけていることは何か。又、東大の何が問題か、私たち自身の目前の中で何がおかしいのかそれを考えていきたいと思う。その前にお知らせをどうぞ。じゃない、私たちの置かれてある位置を考えなくてはならない。それはこの問題の本質、イコール東大の本質を荒つということだ。

□ この問題が問いかけていること

文有志の人たちが運動をはじめたとき、みんなの頭の中になかにあつたのはなんだろう。それは「前にもいつたけど、キマと「企業から金をもらうなんてケシカラン」」「どうなればキマと企業がいいなりになつて、悪いことを研究するに違いない」「何がお察

りだ。百年も悪いことをしてきて何を祝うんだ」とマアこんなところだ。ただろう。それでは何故企業からお金をもらうのはイケナイんだろうか。「それは企業とスルになつて悪いことをするからだ」でも、大学は研究・教育をやる場所なんだから、その使い方までは関係ないんじゃないか……。

本当にどうだろうか。私たちは私たちの場であるこの東大のことを本当に知っているのだろうか。文学部の人たちに有効な反論ができるだろうか。まず彼らのいつていることに耳を傾けてみよう。

<ウ>

百年祭・百億円募金に反対して、文学部の人たちがいつたのは、学生の意見をまったく聞こうとせずに、教授会だけで勝手に決めるな。ということだった。これは確かにおかしな話で、大学には、本来教授だけじゃなく、職員や学生もいることは自明なのに。もう第一の問題は、キリした。それは、「大学で教授たちが、何でも勝手に決めていいか」ということだ。「処分」が問題になつてくれば、それまで見えなかつたものが見えてくる。それは、同じ問題が10年前にも問われたこと。その問いかけが、機動隊導入による「力」で弾圧されたこと。そしてその問題が、いまだに解決してないということだ。そう。私たちは、10年前に問いかけられ、むなしく消えていつた問いを、再び発しなければな

らない。それは「大学とは何か」「学ぶとは何なのか」「我々は社会のなかでどういう役割りを果たしているのか」ということである。そう、まさに「大学論」が問われているのである。

それでも「俺には関係ないよ」という人に、もう一度だけ繰り返そう。文学部では数日の間に40という署名が集まり、民青の下で9年間成立しなかった学生会が成立した。運動は今では学友会レベルにまで拡大されている。しかしそれに対する学校当局の解答は、数次にわたる機動隊導入・逮捕だった。それでもこの事態が文学部のみのもので、私たちの身に警察力の及ぶことはありえないのだろうか。

□ 東大って何？

それでは、東大のいったいどこが問題なのだろう。まず、その社会的機能を少し考察したい。それがわかれば、「反東大・反百年祭」ということも理解できるだろう。そしてそれが完全なら、私たちの一種のおめたさも、さすがに動揺をきたすに違いないのだが、さくばらんについて、河沙も力量も資料もついでに気力も足りないというわけで、未だあまいいななかでもかいてある。だから以下の記述も不完全で、東大の善男善女諸君に一喝を与え

るには至らないと思うが、一つの問題提起として受けとめてほしい。

よく耳に入ってくることだが、東大は「産学共同・官学共同・単学共同の総本山で」「差別・選別体制の頂点」といわれる。事実はどうなのか、目をうじあげて、見据えねばならない。

東大の学問は何に役立っているのだろうか。社会の進歩だろうか、それとも一部の教官のいうように「学問は真剣な遊び」(S.K氏)であり、「何に役立っているか」などと問うことは野暮なのだろうか。

見落してならないのは、東大の学問も国民の税金でまかなわれているということだろう。最低限国民に役立つことを、少しはやらなければならぬ。「真剣な遊び」などといつてると「税金返せ」といわれかねない。「直接役立つていないようでも、迂遠な形で人類に役立つのだ」という人もいるが、冗談じゃない。今はそんなことをいつてられる時代じゃない。そりや学問の中にはさうじゃなきゃならぬものもあるだろう。でも全部が全部さうじゃ困る。そればかりか、東大の学問は悪いことをしてるといふ話もあるのだ。

□ 公害の元凶？

例えば公害のことを考えると、何が「役

立つ」だろう。私たち人類は危機に瀕している。それに対処するべく、人のゼンで「真理の探究」にうつつをぬかしていられるのだろうか。東大には、住民の側にたつて実証的に公害企業を告発している宇井純氏がいるが、彼の言葉を借りれば、「公害の元凶はいつも東大」ということになる。

公害問題が起きたときに「いや、これは公害じゃない」と「科学的」に企業を弁護したりするのはいつでも東大教授であることは御存知だろう。宇井氏によれば、それらは企業からのお金ほしさに、科学的手続きを踏まずに出されたコジツケ的弁論なのだ

そうだ。企業は大学教授の権威がほしい。東大なら一番いい。彼は、東大教授がアチコチで悪いことをするので、その尻ぬぐいに自分が飛び回らねばならないと嘆く。

別の方から見てもみよう。何と世にいう公害企業の管理職の半数以上は東大卒だといふのだ。そういう人達が単に学問とは、いったい何だったろう。地球を汚しつくすことではあるまいだろうに。

また、次のような疑問を考えてみよう。「ちまたにかくも多くの経済学部生が、卒業生も多いのにな、何故景気は回復しないのだろうか。」

もし、不況にあえいでいる労働者がさういったとしたら、その上前をはわて経済学をやっている人たちはどう答えるのだろうか

う。もちろんそれは「経済学」だけでなく、すべてにあてはまる。

もう一つわかりやすい例をあげておこう。あなたも成田空港は知ってるだろう。「存知のように、あそこは今日に滑走路が一方向だけで、とても「国際空港」などと呼べる状態じゃない。しかも先のメドも立たぬまま、工事途中での見切り発車である。その成田空港のマスタープランを立てたのは、東大の都市工学研究室だぞうだ。いったい三里塚の農民に何というつもりだろう。

□ゼニのための学問

このように考えると、東大における学問が何のためにあるのか、ということが段々わかってくる。どうもそれは、主として「出世のための学問」であり、「ゼニのための学問」としが考えられないようだ。学生においても当然それは問題だが、「職業としての学問」を志す教官がそういう姿勢なのは、実に問題だ。それにしても、工学部など、企業界からの委託研究が、正式予算の3〜4倍にもなるなんて、いったい「学問のための学問」すら存在するんだらうか。

□支配者のための機関

「産学共同」も同様だ。教授はゼニを、

企業は権威を求める。持ちつ持たれつの関係である。何も企業は特に東大に学問的成果を期待しているのではない。また、東大の教授連には、その実力があろうのらうか。大体教授人事がいまだに業績よりも、学問・團圓(だんげん)で決まってるのだから、その学問的水準も知れよう。「東大幻想」を捨てて見れば、学問的には世界レベルには達せず、総体として日本一でもないようだ。「産学共同」にしてもしかり、官庁は権威を求める。「東大幻想」を持つ国民には実に効果的だ。「単学共同」となるどころか、つとむとい。これは東大ではないが、米軍のための日本の地理的情報の伝達とか、果てはベトナム戦争のための細菌兵器の研究まである。東大も、米軍から105万の研究費をうけてっている。

□生と知性の乖離

これだけいてもまだ小さくない人が多いだらう。東大は何処何でもスバラシイ

所のはずだし、又さうでなければならぬのだ。でなければ、何のためにあんな受験勉強をくぐり抜けてきたのらう。私たちの多くはこんな風に考える。確かに設備はこれでも日本一だろう。「それに東大教授といえど、研究はもちろん人間も立派なはずだ」本當にさうだろうか。

この問いは、さまざまにニュアンスを含む。広範な視点からとらえれば、折原氏のいう「生と知性の乖離」の問題である。この問題が最もシビアな形で問われた東大闘争に例をとろう。

まず東大闘争の発端は、当日問題となつた場所に居合わせさせしなかつた学生を、当局が処分したことからはじまった。「大生」における論議は、正確な事実確認をもって、客観性を保持して行なうべきである。といつていた教授連が、その「事実確認」すら行なわず、「議論」も尽きたかたわげだ。それだけではない。当時東大闘争に飛び込み、その解決にあたらうとしたのは、全教官のわずか10%位だったといわれるし、機動隊の学生に対するあまりの暴行に抗議するよう要請した助手に対し、ある教官は「警官だつて人間、場合が場合だけに無抵抗の人間になぐるけるの暴行を加えてもやむをえない。それに東大は、警官隊に抗議できる政治的立場にない」ととり合わかたといつ、何じろ社会主義者で反体制を

標榜していたマル経の大家でさえ、機動隊を讚美したというのだ。東大には、学生が死にかかっても平気だが、自分の研究資料が放水であらされると嘆き悲しみ、しばらく編込んでしまうような教官くらい、いても当り前かもしれない。彼らにとって、「学問」とは、いったい何を意味していたのか、深刻な疑問が湧いてこよう。

当時の処分に関して、折原氏はこういつている。「学生の行為を人間の行為としてとらえようとせず、身分的上下差別・支配―被支配の関係におさえこもうとする教授会の体質から必然的に生じた帰結である。」この構図が、今だにまったく変わっていないことは、火災や機動隊導入の際に当局のどつた態度に如実に示されている。今道文学部長（当時）のごときは、東大闘争はまったくのムダだった。と広言してはばからない。いつまた必然的に処分が私たちに降りかかってくるかもしれないのだ。

□ 人間選別機関としての大学

もう一つの差別選別体制の頂点というのは、より私たちの問題だろう。

これについては、あまり言うことはいかもしれない。私たち自身、よく知っていることだからだ。

私たちはエリートとされている。多くの

人はその通りだと思っているし、自分はエリートじゃないと思っている人でも、それではお前は東大を辞められるか。と追われれば、恐らく尻込みをする。というのが本当のところだろう。特権として、東大生であることは保持していたい。という気持ちがある。私たちのどこかにある。

しかし、考えねばならないことが、とりあえず2つある。一つは、本当に自分が、優れた優良であるかどうかということだ。ひょっとすると、全く「いわれなき」差別にのっかってもっているかもしれないのだ。つまり、具体的にいえば、単に記憶力がすぐれているだけのことかもしれないではないか。単に憶えるだけならコンピュータにもでぎるし、しかもはるかに効率的である。本気で自分が優秀だと信じている人は、一度考えてみてほしい。すぐれているというのは、本来、創造力と感受性でみるべきだろう。

もう一つ、私たちが東大で学問をする。そのお金がどこから出ているか、ということとがある。ここにおいて前述の教官たちにつきつけられた責任が私たちにも及んでくる。私たちが「他人のフンドシで相撲をとっている」のだ。エリートとしてその権利がある。といふおちる人もいるだろうが、先にもいったように、そのエリートたるや奥にあやしいものであり、今までの企業に要

求された「守り」型人間を選りわけろフィルターを通過したにすぎないのだ。そのうえ、今や企業でさえ、フィルターの交換を考え出している。しかも、そのフィルター通過能力さえ、先行教育投資によるものだということは、今や400万を越えた親の平均年収が示している。今や教育は、階級間の流動性さえ失ってしまった。

□ 東大に入って損が得か

しかし、だからといって次のような反心が出てくることは避けられないだろう。

「東大が問題があるところだということには分った。しかしオレは東大を出て、出世して、楽しく暮らせばよい。とにかくも前途は有望だ。何もおまえにくち出しされる覚えはない。」

こういうエゴイストには、もういふことはないし、エゴイストを攻撃してもなしのツツテだろう。だが、本当に「出世して楽しく暮らせ」るか、「前途はバラ色」か、私たちにも関心がある。冷静に考えてみよう。少し懸念の問題をたてよう。

「東大に入ったのは損か得か」

この問題に対する一般解答は、実印でできない。けども、もう少し細かく碎けば解答できるようになる。まず「私達の学問は役に立つ学問か」を以て「東大の特権はいつ

までも保障されるのか」。考えてみよう。

第一の問いにはすでに答えてきたし、毎日の議論を考えればわかるだろう。

第二の問いについては、「学歴社会」といわれる。東大を卒業するということが、出世の切符を手に入れることとされ、私たちもそれを、何となく受け入れ、将来にわたって都合の良い「学歴社会」が続くことをあまり疑っていない。しかし、客観的に社会情勢を見よう。不況である、高度成長はもはや望めず、重ねて、エネルギー危機など深刻な問題もある。自然、企業は生存競争も激化してさう。そうならば企業は名より実を取り、なりふりかまわずspareしやうとするだろう。そして激動の状況に對処すべく「守り」型より「攻め」型の人間つまり創造性のある人間、問題提起能力にすぐれた人間を求める。実際、年功序列賃金はくずれつつあり、就職にしても、大卒名より、オリジナリティを求める企業がふえつつある。

確かに今の所はまだ安泰だ。しかし、この傾向を押し進めていくと、創造性に富むとはいえず(ひょっとして押しつづけてしまった)問題解決能力によりすぐれた「守り」型の東大生は、以前のような意思に預けられなくなる恐れがある。「落ちこぼれる」とはいわないが、「バラ色」とは絶対ないえないだろう。それでもまだ「バラ色」を

信じ込んでいる人がいるとすれば、よほどの阿呆である。「知識が役に立つ」といったところで、現在の最前線が、五年もたてば木口阿呆というのは理系ではもう常識だろう。「分析能力」中心の「優等生」では「総合能力」に乏しく、行動に結びつかないものである。第一、記憶能力だけで、「考え方」などあまり身につけていない人間が多すぎるように思うのだが……。

□ 文化を支えるために

さて、少し整理してみよう。今は、キリしてきたのは、私たちが絶対と信じて乗ってきた「レール」自体が、その絶対性を問われているという事実だろう。その根源が、「教育とは何か」という問題であり、私たちに引きつけて考えたとき、「大学論」の形で出てくることも明らかになったと思う。そしてこの問いかけが、10年前発せられたまま、今だに答えを得てないことも。

『恒河沙』が掲げるものの一つは、「場の文化」の概念である。今、東大生としての私たちが、その存在の根源に対する問いかけに答えることなくして「文化」を語ることはできない。もう、なぜ私たちが、くり返しくり返し、ほとんど支持の得られない問題に二だわりのか、わかってもらえたとと思う。

そう、私たちはのんびりとしていられないのだ。今、自分を、東大生としての自分を見つめなおすことが必要ではないだろうか。

□ 何が最低限必要か

だらだらと書いてきて、問題の中心から離れてしまったこともあったかもしれない。しかし、多少でも関心を持ってもらおうきっかけとなれば、と思ったのである。まわりを見まわすことなく、自分の眼前だけを見て、与えられた方向につきすすむのは、やさしいことである。そう、競馬の馬のように。しかし『恒河沙』は、今さらのようだが「人間性」を呼びかけた。

ともあれ、今日も事態は進んでゆく。ただ、そこに問題があることを知っているだけでは意味はない。情況に何らかの形で関わることは要求されよう。「知る」ことと「行なう」ことは分ち難いことだ。

けれども『恒河沙』は、具体的な形での行動を提起するつもりはない。ともに問題を考え、自己の良心に従った、積極的・主体的な行動を期待するだけだ。(例えば署名のような)「声なき多数」となって、ズルズルと当局に加担するだけでは避けてほしい。それが最低限だ。声をかけてほしい。『恒河沙』はいつでも君を待っている。

叛乱と牢獄

(M君の手記)

百億田募金反対を直接的契機として始まったいわゆる「文学部問題」は今、文ホール解放と裁判闘争の2つに焦点を絞りつつある(「文学部の動き」参照)が、その中で、実際に運動にかかわっている人は何を考えているのだろうか。今回、編集部では、去る2月14日の機動隊導入の際逮捕され、現在裁判闘争の渦中にあるM君に原稿を依頼した。

民衆の自由を希求する者は、自己の自由が奪われることのあることを覚悟しなければならぬ。

自由を欲する者は牢獄を恐れてはならない。

本屋で目にとまったタン・マラッカ(インドネシアの革命家)の自伝「牢獄から牢獄へ」をめぐつて、右のような文句が飛びこんできた。まことに牢獄は社会の縮図である——私が2・14弾圧被害として東京拘留所の独房にいた間につかんだ確信はそれだった。民族解放闘争・独立闘争に身を投じて、その人生のほとんどを獄中で過ごしたタン・マラッカに、逮捕から教えて九十余日間拘留されていた自らをなぞらえようというのではない。我々が生活する空間、市民社会が目に見えぬ鉄格子によって囲まれ、枷をはめられていることを、独房の鉄格子は可視的な姿で直視させてくれるのだ。だから獄中での生活とは、苦痛を味わわせるものというよりは、ふだんの生活の凝縮したものである。

牢獄とは、抑圧を目的とする政治的、暴力的な強制、暴力装置の一環である。他方日々の生活の中では、当り前で不可避なものとして、おそろくはすべての者によって受け取られている日常的な商品関係を通しての支配がある。パンや衣服の「購入」、家賃や税金、授業料の「支払い」、労働力の「販売」などの商品関係を通じた資本の支配! またマス・メディアによる大衆の意識の操作。それぞれ

の時代の支配的イデオロギーは支配者階級のそれであったし、今もそうである! そしてこの資本主義的商品関係が危くなる時、牢獄も含む政治的、暴力的装置の発動によって、資本の支配を維持しようとする。独房を囲む鉄格子は、これら日常の生活を支配する関係性、日常生活に貫徹している関係性を暴きだしたのだ。

どのような闘争であれ、社会を貫徹するこの論理と相拮抗しつつ現われてくるのだらう。この社会に依拠し、またそれを補完する大衆において、ごく当然で不可避なものとして受けとられている、教員・教えられる関係、管理・被管理の関係、教官の単位認定権。実はこれらのことが「普通」でもなく「不可避」でもないのだということ、そのことを理解する瞬間、学生はそれらの構造の解体へと立ち上がる。ちやうど、企業において経営者が命令し、機械や工場がそれを動かす人間とは別の人間に属している、等々のことが「明白」でも「自然」でもないことを、大衆が突如理解するように。そしてその事態の根本を変えようとするように、事態の根本を変えようとして立ち上がる学生の間には、まさに叛乱と呼ぶにふさわしい。

昨年文学部に起きた事態はそれであった。それは、百年記念事業、百億田募金を媒介にしていた。その叛乱が、闘争の中において言葉として出て来なかつたとしても、それはさして重要ではない。またその闘いの規模がささやかなものであっても本質的問題ではないだらう。それにもかかわらず、生じた事態の根柢には叛乱への萌芽

がはらまれていた。既成の構造を突き破らんとする息吹き、管理総体をひっくり返し、教授会の依拠する権力機構を撃つ闘い——それがために生じた今道をはじめとする弾圧者たちの恐れとは、労働者のストライキに革命のヒドラを見た某国外相のそれと相通するものだろう。であるが故に、9・22火災とそれ以降一連の弾圧と、2月14日の機動隊導入、逮捕、文ホールロックアウトは一直線につながれるものとしてある。叛乱の根を絶ちきること、これが今道らの願い——それが意識されているか否かを問わず——であった。

もちろん、文闘争を見る時、そこに至る歴史的経緯、情勢、大衆意識の変遷、戦術の当否などをぬきに全てを語ろうとするのは、片手落ちをまぬかれないだろう。それはまた別の場にゆずろう。そしてそのような学生叛乱が、一学部や一大学においても、また学生総体のみによつても究極的勝利を克ちとるまでに至らないことはあるだろう。(十年前の全女闘の闘いを見よ!)一つの企業での工場占拠や労働者管理が、全社会的な闘いと連携する中でしか勝利でき

ないように、どんなささやかな場所における叛乱もまたそれを必要とすることを文闘争は予感させた。

様々な弾圧は、逆説的に闘争の地平を示し、また視野の広がりをもたらす。ひと口に「高揚」と呼ぶ闘争のうねりの中で、見え隠れするものを自らのものとすることによつて前進があるとするなら、牢獄もまた前進の糧とすることができる。牢獄は社会の、そして文闘争の縮図であった。我々が既成の構造を拒否する時、暴力的強制にすがる者たちがいる。その暴力装置とは、管理—被管理、単位認定権の形を変えた姿に他ならない。皮肉にも日常の生活において、これらの目に見えぬ鉄格子に耐えることには十二分に慣らされてきたのだ(それを苦痛とも感じないまでに!)。か、一たびけらまれ、経験された、これらの枷を破壊していく闘いの息吹きは、どんな鉄格子によつても消えることはない!まことに、自由を欲する者は牢獄を恐れてはならない。

文闘争のオモロサに関して

15・18学大のことなど (文学部学友会委員有志)

文学部という「何が起ころかワカラン、オモロイ所」というのが世評であるが、そのことは昨年の5学大を転回点としての斗争高揚の中で証明されてきた。また文闘争の突き出しているのは、大学内存在としての「私」などに留まらぬ根源性を有しているとも思われる。

文学部で百年祭反対の運動が形をなしてきた頃、76・77年、駒場では相も変わらず沈みきったキャンパスが年に一度のお祭りとかで息づくばかり、代議員大会への100人ぼっちの結果は「諸要求実現」のホス交の踏み台にされるくらいのものであった。文学部にしても旧民青執行部の下での9年間沈滞しきった学大を

経験してきたのだし、私達の学大に対する期待もそんなに大きなものではなかつた。ただ、精一杯の結集軸としての学大、それへの道を私達の一つの直接行動が切り拓いて行ったことだけは言える。兜も大組織も持たぬ私達が一番の依り所とするものとして、日の前に「学大」があつた。単位認定等含めた、管理・被管理の末端としての学大からの叛乱の一部ではそのようなイメージを提出していた学大運動の先導、そしてそれからの飛躍を繰り返す中、文学部反百年運動の歴史は形成されてきた。

募金反対100署名の結集、当局による10・26確認の空洞化、学部長室坐り込み、これへの機動隊導入、めぐりめぐる情況に立ち向うべく、「学大」ははじめて内容ある「募金反対学大連」として成立したのが78年4月5日のこと。「反百年」を叫び、5月学大という結集軸の回りに群がるこの集団が5・18学大で「学友会」団交更へと発展した。

新たな潮流はまた、情況に遅れた習性努力を追いおとす。党中央の指令一下、党官僚養成機関である東大の百年史を「イトコム悪イトコムもある」なる歴史のゴツタ煮でもって真摯に問あなかつた日共民青、そんな欺瞞を振り捨て、文当局との交渉で反百年を問おうとする者に対し、当局への処分要請まで行なつた日共民青。「暴力反対路線」で革命の力の字も忘れ去つた同盟員を締め直すつもりか、文学部4・20集会への突撃隊となつた日共民青、彼らの最後の活躍シーンは、518学大で「暴力学生一覽表」をモゾリ紙に大書して登場。それこそ空しく非難の声に圧倒され、文学部からの撤退を余儀なくされた。この民青死七宣言以降、文学部ではあの能面ゾラと二枚舌は通用しないのである。

518の主流はもつと生き生きしていた。何度にも渡り研究室を転々として行われた各学科・学科間討論を踏まえた発言者、また、運動の輪から遠くに居た人が慣れぬ手つきでマイクを握り、文3番大教室はさながら反百年をテーマとしたリヒンク・シアターとなつた。

団交更結成を始め、新大管法140通達粉碎・務転再編阻止・臨時斗争準備、70年職の暴行糾弾等々の全て提案が圧倒的に可決、現・学友会の基本路線はここで確立したといつてよい。

さて、この学大で誕生した団交更とは、また「反百年運動」とは何なのか？「反百年運動」とは何なのか？「反百年運動」を、「100年祭を通じて」当局の務転再編攻撃の独占的強行に対するカウンター・パンチ②「東大百年」なる化物を、個別東大のみならず、近代日本・近代社会に一翼する構造物として捉え（92研究至上主義体制「能力・効率主義・差別選別体制」資本の支配・管理）それを止揚する方向性を運動の中で動的に造り出す、運動「態」として行なつてゆく。形態的には、当面、公開大衆交渉を中心とし、組織的にも、誰にも開かれたものとし、役員を一切置かず、ホス交を拒否した。

518学大以降、予備折衝・ストライキ・一週間後二度目の学大成立勝利・再度予備折衝といつた展開の中で、文学部には反百年の「声」が充満した。神も主人も持たぬこの「声」は、当局からすれば極めてたごの悪いことに自己増殖し、立看・ピラの上を、マイクの中をはいすり回り、無内容な対応に終始する文教授会に浴びせられ、518までは某政党新聞置場と化していた文ホールに満ち満ちた。

420通達条項「大学本来の使用目的」とやらを意味なきものにし、それ故にこそ92以降、国家権力総出動による処分攻撃、24弾圧を受けるに至つた文学部の斗いの原点は518学大であった。そこに凝縮された文闘争の「オモロサ」は現在進行形で継続中である。本年522学大で結成された「文ホール自主管理運営委員会」が新たに反百年の内実を問い直し、各学科で自主ゼミが乱立し、街頭芝居が行われる。24裁判闘争を抱える私たちはこんな空気のなかで今日も、文ホール空間奪還、果てのない反百年の永久運動を闘い続けている。法文2号館一階の学友会連絡所（小屋？）にちよつと話でも聞きに来て下さい。

(匿名希望)

文学部の動き

事実経過及び資料

編集部

編集部では第4号の「文学部問題を追う」第一部資料編」でいわゆる「文学部問題」の発端から今年の五月祭までの動きを資料から眺めてみた。ここではその後の動きを追ってみたい。

24機動隊導入について

現在文学部は反百年祭運動を継続しつつ、二つの大きな具体的問題を中心に動いている。一つは文学部学生ホール（以下文ホール）解放運動、一つはM君裁判闘争である。これら二つは、文学部学生の反百年祭基金阻止闘争に対する当局側の攻勢も、学生側が抗議・糾弾するという形をとっている。24機動隊導入、M君ら三人の逮捕、M君の起訴、文ホール全面ロックアウト（これらを24弾圧と総称する）を、文学友会は次のように位置づけている。

24弾圧は新大管法攻撃、420文部次官通達を背景として、学内においては闘争圧殺の、全国的には新大管攻撃の更なる苛烈化の突破口の目論見としてあった処分策動に破綻する中から生まれてきた。（文学友会710声明）

そして、これらの「権力の弾圧と非和解的に対決」するとしている。

さて、これから文ホール問題、M君裁判を個々に追っていきたいが、その前にこれらの

き「かけこな」た24機動隊導入まで遡って若干の説明を加えておかねばなるまい。

昨年9月22日の火災以来、当局による座り込み学生に対する処分問題が表面化、また文ホールは5時ロックアウト、後に7時消灯という状態が続いていた。これに対し、今年2月13日、文学友会は1月26日の学生大会決議事項に基づいて文ホール及びその周辺区域で文ホール二十四時間自主管理闘争に入り、また同時に三名の学生が処分反対のハンガーストライキに入った。当局側は学生のこれらの動きを「不法占拠」（2月15日総長談話）と見て、同日退去勧告を、翌14日には退去警告、退去命令を發し、ついに2月14日午後10時10分機動隊を導入、学生を排除、うちM君を含む三学生が逮捕された。なお、この機動隊導入の要請は13日の段階で手続上不備のため本富士署に一旦拒否されたという面白いいきさつがあった。

さて、機動隊導入直後、次の一片の掲示により文ホールは全面閉鎖される。

当分の間、文学部学生ホールならびにその周辺区域への出入りを禁止する。これは、同区

百年祭・文学部関係年表(2)
(4号より続く)

- 515 M君裁判第一回公判
- 518 自治会中央委員会
- 519 M君保釈
- 522 文・学生大会、文学部学生ホール自主管理運営委員会設置
- 523 文学友会、文教授会に「昨年八月の予備折衝の確認にもとづく団交開催」を要求
- 525 五月祭、法文一号館四階・二号館使用できず
- 6 文教授会、三好行雄教授（国文学）第二委員長に
- 6-8 文ホール自主管理運営委第一回総会
- 6-11 文ホール自主管理運営委、文学部各教官に公開質問状、自治会中央委員会、文・農・医欠席
- 6-13 大場学生部長、自治会中央委との話し合いで、「基金百億は無理」と本音
- 6-20 文教授会、文学部大集会
- 6-27 文学友会前期選挙、反百年・文ホール解放選対圧勝
- 6-28 文ホール自主管理運営委第二回総会
- 7-3 新委員による文学友会委員会、H君委員長に、前学友会の反百年祭・文ホール解放の運動方針を継承
- 7-4 文学友会、文第二委員会と文ホール問題で折衝、文ホール自主管理運営委主催の文学

域内で学友会が不法占拠を行、たかうである。

昭和54年2月14日 文学部長

また、逮捕された三学生のうちM君は3月8日に起訴され、残りの二人は釈放された。こうした状況の中で、文学友会は28臨時学生大会(春休み中なのに成立!!)この学大については「東大新聞」3月9日号の記事が興味深い)を経て、文ホール解放、M君無罪釈放の運動を組んでいくことになる。

なお、この機動隊導入に対して、民青系各自治会執行部は全て「文有志の挑発」と評した。

文ホール解放について

文ホールの扉は2月14日以来一度も開かれなかった。ロックアウトは現在も続いている。文ホールは駒場の学生会館にあたる。

文学生ホールは、従来、24時間学生の自主管理下におかれ、学友会活動・サークル活動・読書会活動の他、ちよつとした持ち合わせなどにも幅広く利用され、個人ロッカールの使用を含め、多くの文学部生にと、なくてはならないものとして機能してきました。

(文ホール自主管理運営委公開質問状前文)

この文ホールの閉鎖で文学部学生は自主的活動の場を全く奪われたことになる。また、今春卒業生も含む(一)学生の私物はホールの中に置かれたままだという。駒場の学館の閉鎖という状態を想定すれば、ほぼ間違いないだろう。

う。

こうした状況の中で学友会は「文ホール解放」を一つのスローガンとして運動を進めた。教多くの学科討論、学科間討論を経て、5月22日の学生大会において哲学科など9学科有志の特別提案を受けて、「文学部学生ホール自主管理運営委員会」が設置された。特別提案の内容は次の通り。

文学部学生ホールロックアウトを粉碎し、我々学生の手で学生ホールを管理・運営していこう。

以上の目的を達成するために、文学部学友会の正式機関として「文学部学生ホール自主管理運営委員会」を設置し、

- ① 関係当局との交渉
- ② 実際の管理・運営

を遂行していこう。

同委員会は6月8日の第一回総会に基いて、文ホール閉鎖についての公開質問状を各教官に提出するなどの動きを見せている。話は横道にそれるが、同委員会が質問状を手渡した際の教官の反応を特集したビラはなかなか面白い。それによると、例えばI教授は「帰りましたえ、帰りましたえ。ジャマだ。うるせえなあ本当に、うるさいうるさい。答える意志はない。11番に電話するぞ!」という応対をしたそうだ。まあ、そんなことは余談として、こうした運動の動きは、6月末の学友会選挙における「反百年・文ホール解放選対」の圧

部集会

- 76 学友会救済主催の「裁判を暴く」連続シンポジウム第一回
- 712 M君裁判第二回公判
- 75-1 8-8 15-22 8-8 24 学友会水曜集会

勝(議長選で305対96の大差、学友会委員は28議席中27議席)という形で学生により確認されている。

M君裁判について

先にもふれたとおり、2月14日の機動隊導入の際、M君を含む三人の学生が逮捕された。容疑は昨年12月26日の今道文学部長(当時)に対する暴力行為。「学生による文ホール占拠」に対してなされたはずの機動隊導入による。二ヶ月も前の「事件」に関する逮捕、「事件」から二ヶ月も経ってからの逮捕とはどうも解せない。これは何を意味するのか。文有志はこの逮捕を次のように分析する。

2月13日今道は処分案を総長に上申したが、すでにこの強引な処分案に対しては文学部教授会内部にも意見の不一致があり、全学の評議員レベルでも処分に対する強い疑問の声が次々とあがっていた。こうして処分による弾圧の見通しが暗くなり、今道は機動隊導入でツチ上げ刑事事件化の弾圧へと踏み出した。いったのである。24機動隊導入は「文ホール不法占拠」に対してなされた(総長)などと

いふのは全くのこじつけに他ならない。
(710ビウ)

すなわち「警察・司法権力への『学生処分』の委託」(文学友会)であるというのである。こうした分析を念頭において次の事実を見る。どうだろう。逮捕は今道氏の被害届によること。24機動隊導入の際、逮捕された学生のうち二人は本部職員がその場で指摘した学生であったこと。逮捕された時の容疑は12月26日の暴行だったのに、M君起訴時には11月7日の暴行にかわってしまっていたこと。この三つの事実を次のように解釈できないだろうか。逮捕は当局も関知していたものであり、加えて、何が何でも起訴まで持ち込む必要があった(12月26日が駄目なら11月7日というように)。「学内処分の破綻↓司法による処分」という図式はあながち無理な解釈とは言えない。

さて、三名の逮捕をうけて、文学友会は2月23日臨時学生大会を開催。そこで①14弾圧自己批判②起訴反対・釈放要求の確認を内容とする総長に対する団交要求を決定。「警察・検察権力一本富士署に対し、三学友の即時釈放を要求する」という行動方針を決議、行動を開始した。逮捕された三名はこの間「連日七時間余りの取調べを受け」(三学生の獄中アピール)その内容は東大新聞によれば「火災にまで及び、別件逮捕の可能性もでていた」。

結局、3月8日M君一人が起訴され、焦点

は裁判へと移っていく。文学友会は

M君裁判斗争はM君個人の問題ではなく、反百年運動の中にしつかりと位置づけられるべき問題であり、(学友会救済「救済ニュース」)として、積極的にM君救済活動を担い、保釈金カンパ(M君は5月19日に保釈)、公判の傍聴、「裁判を暴く」連続シンポジウムなど地道な活動を行なっている。

公判の動向については、残念ながら編集部のお慢から資料不足で詳しいことは書けない。そこで、ここでは去る7月12日の公判での面白いやりとりを紹介しよう。

弁護人の「某はその場にいたのか」との質問に対して、今道が「覚えていないがいたように記憶している」と答えたものである。この発言には裁判長まで笑う始末。この類の発言は尋問中各所に聞かれた。「覚えていませんが、その可能性はあります」など。

(学友会救済「救済ニュース」)

今道氏、なかなかメチャなことを言いますな。裁判のおおまかな進行状況は、これまでの二回の公判(5月15日、7月12日)で検察側の立証が終わって、次の公判からは弁護側の活躍が始まるそう。反百年祭運動などの「事件」の背景にも言及しつつ弁護をするそう。さあ、いよいよこれから本番です。とM君は言う。次の公判は9月13日(木)である。

以上が、簡単ではあるが、文学部の最近の動きを過去の事実も含めて、できるだけ資料に忠実に追って見たものである。これを読んで「なんだ、反百年祭という焦点がぼけているじゃないか」と思われる方もいるだろう。しかし、文学部の人々はこうした運動の中でも決して反百年の眼は失っていないはずだ。

ところで、以上のような動きとは別に文学部では文ホールの解放を待ちきれない人々が「東京一登壇」という団体に集って、「自らの文化の創造」をめざして演劇、映画祭などの文化活動を始めている。非常に面白そうなので、いずれ本誌上で取り上げてみたいと思う。

最後に、筆者は実は、この「事実経過及び資料」をまとめるにあたって、実際に本郷の文学部まで行ってみた。きつとコワそうならばかりに違いないと思っていたのだが、文学友会の連絡所に話している人々はどれも優しそうなお兄さん。資料収集に快く協力してくれた。文学友会の連絡所は法文二号館のアーケードにある。毎日営業しているようだから、一度行って、そこに座って人と話をしてみるのもいいだろう。

なお、民音系は、この問題に関しては最近ダンマリを決めこんでいるようで、今回の資料収集において、民音系の新しい資料がほとんど手に入らなかった。ダンマリはやめて、もっと活発に議論すべきであらう。(蟻)

東大をめぐる雑感

岸本 修

文学部問題はどうか。他大学生ながら、とても関心を持って注目している。けれど、なぜ文学部だけなのだろう。百周年の問題は他学部では突出してこないのか。問題としてはあるのだろうが、どうして専断として膨らんでこないのだろうか。悪い意味でも良い意味でも現在の日本において、東大がいろいろなところと与える影響の大きさは否定しえない。だから全学的に盛りあげればたぶんすごい。

他大学生による東大論などというのは可能だろうか。具体的に自分と東大との関連を考えてみる。幾人かの友人たち。恒河沙とのかかり、見田ゼミ。それとかなりよく利用する設備技研、品物豊富の生協。そのきわめて少ない、かかわりの中でなに見えてくるのだろう。考えようによっては、今、自分のいる和光大学の次くらいに自分の生活現場となっているといえるかもしれない。

現実として、どうしようもなく頂点に立っている。ピラミッドの頂点の大学—東大。これは、どんなにうそぶいても、卑屈になっても、自分自身が否定しても、東大生という属性が付与されたとしたん暗黙のさまざまな特権がまとわりついてくるように思える。そのうえ、その位置からのうのと未来を展望すれば安定した高い生活が延々と続くかのようにみえる。そして、大部分がその通りになっていくだろう。教育制度を頂点まで勝ちぬいた結果、ある種の権力が学生でありながら、得られる。その力関係は、日本の教育制度その

ものの力関係と等置だ。もちろん、公権力のような権力ではない。けれど、東大生であることが、この社会においてそれだけでどんなに力を持つか、東大生の諸君は自明のことと思う。たとえば、家庭教師における他大学生との賃金格差、など。

教育体制におけるヒエラルキーは、日常生活をも貫徹する。うんざりすることだが、次のようなことは、まさしく、大学差、人間性差、知性の差とみなされて新しい差別を生みだしている。

家族が四月に地方へ越すため、ぼくは三月中ごろからアパートさかしをはじめた。ある不動産屋で係の人と話している時、一人の学生風のおそらく地方から出てきたばかりの新入生であろう男の人が他の手のあいている係の人に尋ねた。

「あのオ、ドアに貼ってある四じょう半の部屋、まだ空いてるでしよつか、えっ？どの部屋？あ、あれか、空いてるよ。あんた、学生？」
「え、ええ、ふーん。どこ？」
「あ、あの〇〇大学いれゆる「有名」じゃない大学」
「え、〇〇大学ねえ、べさもバカにしたように」
「〇〇大学か。まっ、一応、大家さんに電話してきいてみるか。」

「あっ、もしもし、いつもお世話になってます△△不動産です。あのですね、あの四じょう半、借りたい人がいるんで、学生さんですよ。〇〇大学の。〇〇大学。あっ、やっぱりそうですか。はい、わかりました。そいじゃあ、よろしく」と言って電話を切った後、おどおどしはじめたその学生にむかって、「あんた、やっぱり〇〇大学

じゃだめだ。何も言わずにその学生は逃げるかのようにそこを出ていった。自分の孫の話そっちのけで一部始終をきいていたばくは、腹わたがにえくりかえるような怒りを覚え、すぐさま、その不動産屋から立ち去った。これが突出した露骨すぎる例外中の例外であろうか。違う。たくさん不動産屋をまわったが、その全部がこの大学にいつているかを問題にし、それを目安にしてその人間を判断する。そりゃあ、たしかにある程度、判断の基準にひるかもしれない。けれど、世間から見てもより良い大学の学生じゃないとアパートもかりられないのか。これを差別じゃなくして、なんというのか。余談だが、東大生に限るというアパートの物件が何十かあった。これらのアパートを所有している大家は、自分のアパートに東大生ばかりを入居させることではぶんぶん優越感にでもひたっているのだろうか。あわよくば、娘のムコにとでも思っているのだろうか。東大生に限るはあっても、たとえば他大学→早大生に限るなどというのはひとつもなかった。これひとつをみても、やはりいかに東大が大学の中でも特殊な存在であるか、また東大生という屬性が付与されたたん、その人口がこの社会の中でどのくらい特権的な存在になり得るか、うかがい知ることができるところ。おそらく、このことと世間における東大に対するイメージがもはや、ひとつの社会通念として公認されているからであろう。そして、それは教育制度におけるヒエラルキーをより確固たるものにし、日常生活のすみずみまでそのヒエラルキーが滲透していることの証左であろう。

津村高氏が「全共闘 解体と現在」の中で次のように書いている。「公教育とは、プロレタリアートがもし望むならおのが階級を離脱できるぞとよびかけたことに本質を持っていた。労働者の生活が苦しく、自分が縛られていると感ずれば感ずるほど、せめて子供には楽をさせてやりたいという意識が生ずる。(中略)労働者は息子たち娘たちの教育に金をまわし、彼らが高い教育をうけられることによ

って、脱出を夢みる。労働者どうしの団結はそれによって破壊される。過酷な受験競争の中で子供たちに強いらられる敵対は、労働者のあいだの仲間意識が喪失していくことの別の表現にほかならない。そして、結局悲惨なことになんのかんのいっても、圧倒的に金があつてそうなる必然的に世間的地位の高い人々の子供らが、その豊富な資金でもって、有名大学合格専用のための高校、予備校、塾に高い教育費を持って入学し競争体系を上昇していく。もちろん、個人の能力もあろう。けれど、結果としてはつきりあらわれている事実→すなわち、東大生の親の所得の平均が慶大生のそれよりも上まわっていること→をみれば、資本の階級性がそのままそっくり知の位階制につながっていることがみえてくる。そのうえこの知の位階制は、近代的な官僚制をしっかりとささえるものになっている。

教育というものは、容易に日常化する。現在の日本においては、大部分の人がなんらかの形で教育体系の中にかかっている。おかあさん達の井戸端会議から同和教育などに至るまで。だからこそ、その教育のヒエラルキーは日常生活のすみずみまで貫徹するのだ。他のさまざまの抑圧的諸制度の中でも、とりわけ、その抑圧がみえにくい。それほど日常的なのだ。受験体制はまぎれもない抑圧だ。にもかかわらず、それがどっぷり日常茶飯事になりきっているために、自明のものとしてたちあらわれかけている。最近では、ますますそうである。もはや、受験制度に対して少しの疑問も持たなくなつてきているのではないか。ものすごい抑圧のはずなのに、さきめて素直に自明のものとしてあたりまえのように受け入れてしまふ構造が、より強固になつてきている。というのには、経済的な位階制が不況によつてますます知の位階制と露骨に結びついているのが、歴然としてきたからだ。疑問などいだいていたら、貧乏になつてしまふからだ。受験制度に疑問をいだかせない教育、あるいは教育そのものに疑問をいだかせない教育は恐ろしい。ある有名な進学塾の生徒がインタ

ヴューアの「そんなに勉強してどうするの？」という問いに答えた。「そんなこと考えたら勉強でまなくなるから今はそんなこと考えないようにはしてまず。おそらく、こういう子が現在の競争体系の中を勝ちぬいて頂点まで登りつめるだろう。そしてその頂点に位置するのは、まぎれもなく東大なのだ。」

かといって、しかしぼくの東大の友人たちはみんなすてきな奴ばかりだ。また、東大内部から東大そのものと戦っている人々も等しく東大生たちだ。いろんな奴がいる。当然のことだ。けれど、ヒエラルキーの頂点に位置していることがありとあらゆることに對して東大を特殊に位置づけている。特権的な力と頂点にいる故の社会に對する圧倒的な影響力を持っている。だから、両刃の刃なのだ。国立大学という形であるから当然権力が介在する。けれども、その中

大学解体とボク(ニセ学生)

村岡 正樹

正直なところ、文学部問題に關してボクはほとんど知らない。原稿を書こうと思つて大学論通信(編集部注・後出の「大学論」の機関誌)をあれこれ読み返してみたのだけれどどうもピンとこない。大変な問題らしいという事は頭の中で分かつていても、それがボク自身の生き方と結びついてこないのだ。

ボクは東大生ではない。大学論の連中の言葉で言うとニセ学生ということになる。とはいつてもこのニセ学生、多分にいい加減である。東大に初めて足を踏み入れたのは二年前、一九七七年の夏のことで、その頃から大学論にちよくちよく顔を出すようになった。公開

で行なわれる学問と自治は権力から離れようとし、ある場合には鋭く敵對する。大学とは権力機構の中では、きわめて矛盾した存在なのだ。近代的な権力機構が知の位階制にささええられた官僚制によつて成立するにもかかわらずだ。ここに矛盾の裂け目が見えてくる。それだからこそ、権力機構は裂け目に對するアメとして、将来の生活保障——より良いくらしと権力・地位の獲得を保障する。特に東大。

裂け目が見えてこないだろうか。文学部問題は確實にひとつの大きな裂け目であろう。また、東大生であること自体が、ひいては学生であること自体が、とつともなく大きな裂け目それ自身であることを、自ら認識する必要があるように思える。(和光大学、三年)

自主講座「大学論」(本郷)、「公害原論」(駒場)と、行ったり来たりしてはいたのだが、埼玉の北部、赤城おろしの取きすさぶ熊谷から通うのだから大変は大変だった。ちよつと面倒臭ければすぐサボるし、恋愛でおちこんだりするとその欲求不満のはけ口に大学論を利用したりした。

そんな調子なので未だにボクは大学解体の意味が分かつていない。大学解体、聞かれた大学——ニセ学生のボクがあかつていないなんてオマケにちよくちよく大学論の連中と會つて情報を得たり、大学論から天下りしてアテネ社なんて印刷屋を開業したりしている連中と

かべつたりしているホクが大学解体について意味がわからぬ感じが、不届千万などと怒られそうなのだが致し方がない。ホクにはあまりに大きすぎる問題なのだ。

いい加減なついでに言っておこうと思ふのだが、ホクがニセ学生になつたことだつて、大学解体というイデオロギーの七めにニセ学生になつたのではない。たまたま、テレビを見ていたらオコセとか何とか言う奴がニセ学生云々をしゃべつていて、「そういう方法もあるのか、なかなか面白いな」ということでそういう誤りで……

今度は個人的な感慨に浸らせよう。ニセ学とは奇妙なもので方向音痴になつてしまふ。最初、本郷に行こうと思つて電車に乗つた。「ああ、あれがあの宿田塔か」とうとう来たぞ、などと思つたら派が出てきてしまった。忘れもしないあの言葉「君もまた覚えておけ。薬のようにではなく、ふるえながら死ぬのだ。一月はこんなにも寒いのが、唯一の無関心で通過を企てるものを、俺は許しておくものか」としてとどめの一秘急連帯を求めて孤立を恐れず力及ばずして倒れることを辞さないが、力尽さずして挫けろことを拒否する。この言葉、文法的にはいさ知らず、ホクは高校時代にヤンギャン泣かされたのだ。そして宿田塔を目の前にして励まされたホクは、「ニセ学生さあやるぞ」と気持ちを入れた。「

ニセ学生のすすめ」をたよりに文学部を探した。結局文学部があからず正門に戻つて確かめたら駒場だった。十八才の春だった。バカバカしいことではあるが本郷と駒場の区別もつかずに大学解体は叫べないのだ。

こんな調子でホクがニセ学生をやつていく上でなんといつても救いだ。たのが人間社会論（折原浩）。ニセ学だと私大の場合などでは出席カードなんかにはいちいちビククかなければならないのだけれど、自主講座だと堂々と主席できる。大学の教授が皆、折原先生

のような自主講座をやつてくれたらいいなあ、と思つた。できればセミも公開になれば、ニセ学生としてこんなうれしいことはない。

大学解体と言うと抽象的で、あまりに力かすぎる問題なのかもしれないけれど、自主講座をほとんど創つていく作業やセミを公開にするみたいところに、ホクたちにとってできる大学解体があるのだろう。

ところで、ホクにとつての大学解体というのは、大学解体と言つたイデオロギーではなく、具体的なひとつの行動へほんとうにささやかな、悪く言えば日和見的なもの）としての大学解体ということなのだ。ホクは文学部の有志たちのように最前線に立つて闘うことはできない。そこまで自分の生き方が追い詰められていない、くやしい限りだ。ホクは文学部の闘争を支持する。よくわからないけど支持する。だからくやしい。支持するからくやしい。何もわからない自分がかくやしいのだ。きっと自己変革がないのだろう。

最後に、あたりまえのことをひとこと。学がということがそれである。自分の生き方が変わることに自己変革することだとするならば、あたりまえのことをしては、今の大学に於て学ぶことはできないのかもしれない。自分の生き方を根本から揺さぶるような刺激は、大学の中だけにとどまらなくてはなかなかな得られないのかもしれない。だが今まで身につけてきた知識や技術を生かすためにも学ぶことは必要なのだ。

大学は確かにそれだけで下とつての自治を有するコミュニティでなければならぬと思う。がしかしそれは絶えず社会との相互作用がなくては、閉鎖的な執行権の場ではないのである。

大学解体、開かれた大学、こういう言葉のイメージとしてホクが思い浮かべるのは、大学論通信のなりの次の短い文章だ。「内職で糊口をしのぐ人々や行商のおぼろげな五月祭りの東大で店をひらけてもいいではありませんか、これならなんとかできそうな気がするし、できたらきつと面白いだろう。」

「駒場の駅に法律を勉強している駅員さん
がいるよ」と友人から聞き、僕は首を傾げて
しまった。駅員さんと法律、何処で結びつく
のだろう。そもそも法学なんて大学でやる学
問の中では一番つまらないという定評がある
のに、何で法律なんかやっているんだろう。
趣味でやっているのかな。

この疑問から、駒場唯一のコミュニ
ティマガジンを以て任ずる我が恒河沙
編集部ではこの駅員さんを取材してみ
ようという事になり、7月26日、実際
にこの駅員さんに話を聞きに行く事にな
った。

まずは自己紹介から。

「名前は野口容広(よしひろ)、東京
の稲城市に住んでいます」と言
って名刺を出す。そこにはなん
と、稲城市市議会議員とある。
アッとびっくり……とまあ波瀾
の幕開け。

何はともあれ、生い立ちは？

「おやじは東京電力の技師、

おふくろは教員をやっていました。共に東京
の人間です。おやじが死んだ時、おふくろが
遺産を兄弟に均等に分けてくれた。私はまだ
高校の一年だったけど、その金で車を買って
免許をとって乗り回すなど、とことん遊ばま
わった。当時は、東京全体でも免許をもつて
いるのは60万人程しかいなかった。高校時代

人物 クローズアップ

駒場の駅員 野口さん



遊びに徹していたので、大学に行こうとした
時には、おふくろに「もう(遺産の)あなた
の分はないのよ」と言われて……結局、金が
なくなっちゃった。で、仕方無しに京王に
勤める事になった。「京王に勤める傍ら、経
理をやろうと思ひ、簿記の二級を一ヶ月半の
独習で取った。その他、印刷工場のバイトや
タイプライターのバイト等もやって

いろいろの免許をとった。この中で
企業の暴利に驚き社会の予備に目を
向けるようになった。その後何度も
本社の方に
来いという
誘いがあつ
たが、現場
がいいと主
張し続けて
きた」

駒場は4年目だそうである。

京王の労働組合はえらく軟弱で、
労組の役員が会社から引き抜かれて
管理職になってしまふようなケース
もあり、非常に疑問を感じているという。先
にもふれたとおり、野口さんは稲城市の市議
会議員でもある。議員をやrittつも、決して
その地位に安住することはない。現場で仕事
を続け、平凡に働く人々の心を忘れないとい
って、これは、並大抵のことのできるものでは
決してない。今は二期目だそうだが、若手と

して頑張っていて、二度とも上位で当選した
という。

現在の生活は、駅員の仕事、議員の仕事と
多忙を極めているが、それでもしっかりと法律
の勉強や読書を続けている。法律の勉強は一
日一時間ぐらいはやるそうだ。

「法律の勉強は、法学部の学生がやってい
るようなのは全く逆である。大学の勉強は、
初めに条文ありきで、条文を理解してか
らそれを現実の問題に当てはめてゆく。私の
場合は、職場や議員の仕事で実際の問題にぶ
つかったから条文を調べてゆく」と何やら地
元の土地問題について話し始める。話を聞いて
いても、言葉が生活に基づいていて腹の底
から出てくるようなので重みがある。駒場の
アジ演説などはこの話に比べたら、風に飛び
そうなくらい軽いものと思われる。

東大生に対する証文は？

「大学での学問を単なる学問の追求に終わ
らせるのではなく、実際に社会に役立ち、社
会の為になるような勉強をしてほしい。自分
だけが頭がよくなるだけではダメで、みんな
の頭がよくならなくてはいけない」

インタビューする側でも、色々考えさせら
れたが、強烈な個性をもち力強く生きている
人と話ができで大変面白かった。

駒場東大前の改札に新自由クラブの河野洋
平に似ている人が座っていたらその人が野口
さんである。36歳、男の子二人の父。(36)

たはご
戯言

P女の異端児

わたしも花の女子大生なんて何とも世の人が好奇心な目で見るものになって、はや4ヶ月が経ってしまった。わたしは幼稚園からP女に入ってる所謂純本または純Pだから、大学生になってまさほど変化を感じていなかっただ。まわりの顔ぶれもかわらないしね。ただ同じクラス隣の席の見慣れない子が、自分がのんびり勉強のべの字もしないで過ごしてきた高校時代を、テストテストで明け暮れてきたんだと思うとさ、却ってとってそんな人達に悪い気がしたり不思議な気さえしてたんだ。だけと受験を逼ってきた子でも下から上がってきた子でも大学生って基準で見たら何のかわりもないと思うんだ。普通の18の女の子で同じように時代の波をくぐってると思うんだ。だから世の中の人やマスコミが取り沙汰してる女子大生っていても、別に他の大学の女の子と変わらないうる女子大生って今を生きてる女の子達なんだから、どこの大学に行ってるかがその子自体は変わらないうるんだ。だから恒河沙の5月号でさ、東大の女の子が特別視されていやだみたいな座談会があったけど、それはやっぱり彼女達の方に自分達は女子大の女の子達とは違っという意識があるなと思っただ。そういう意識がある以上、東大の女の子は……なんて言われても仕方がないんじゃないかな。わたしは実際東大の女の子じゃないし、世の中の見方に東大にくる女の子は……っていうのが定着しちゃってるのも認めるけど、そんなことにならなくてちやいけないうるんだよね。(日本女子大学一年 寄稿)

恒河沙名物 奇怪 クロスワード パズル No.5 正解

応募総数 2名
正解者 0名

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | カ | シ | ア | / | ホ | ロ | ニ | ガ | イ |
| ス | イ | ミ | ン | ヤ | ク | / | ニ | / | ナ |
| ナ | タ | / | カ | ワ | ト | ウ | ギ | / | オ |
| ロ | ク | オ | ン | / | シ | メ | / | ア | リ |
| / | ミ | ニ | / | ミ | チ | ク | サ | / | ゴ |
| カ | ン | ガ | ワ | / | セ | サ | ミ | / | ウ |
| ン | / | シ | ン | セ | イ | / | ツ | / | ト |
| ゴ | / | マ | シ | ラ | / | イ | ト | ユ | ウ |
| ウ | / | / | ヨ | / | カ | カ | / | ン | / |
| フ | シ | ヨ | ウ | シ | ヤ | / | / | テ | シ |

前々回、余りに正解者が多かった
たので編集部に同僚のあわりを
めいて、No.5は腕を作ったの
て難しいのを通り(?)の見た
ような計画通しをしまし
のになつてしまいが
難しさをいませ
って下さいました

○世田谷の寺内 淳 サマ
○川崎市の宮地 貴子 サマ

のお二人様には時代錯誤社
より敬意を込め、**敢**開賞と
して恒河沙6号を贈らせて

頂きます。「イナオリゴウトウ」を「イノコリセイソウ」とする迷解答もあつて編集部を感心させました。今回は少し手心を加えました。奮って御応募をP

やっぱ東大の女の子は怖い!?

登呂論鵠人

先号「東大女子部をさぐる」では、存在を認識してほいたものの、小生にとつては話をしたこともない女子東大生の考え方の一端を見せただけ、まことに面白く、興味津々で読みました。企画としても、うけるものぞしように、たくさんの方が、真剣に「半ばは好奇心から——女子東大生顔なり、女性論なりを交わすことだろうと思ひます。ところが小生、これを読んでおりました、反対に、東大通つて男としての自分達の姿について、多少考えてみることにありましたので、無内容ながら、ここに少し書いてみようと思ひます。したがつてこれは「女性論」ではなく、どちらかといえは「男性論」に近いつもりです。

——「文一の女の子はコワイ」という感覚について——

実際に同じ教室に座っている人を見てそう思うことは少ないが、単に「文一の女の子」といった抽象的イメージを浮かべると特に、自分自身、はつきりいつマコワイし、「気持ちが悪い」。けれど、僕はそれを半分以上、正常とはいわないまでも、うなずける感覚なのではないかと思つている。文一の女子は実際、よく見ると目がつり上がつているのである。などというつもりは毛頭ないが。

それではなぜか。それはまず、僕が考へるに、文一のやる「法律学」という教科が、何学、何とか学、数ある中で、最もつまらない学問も数多い中で、一番つまらない学問の一つ、とは言い過ぎにしも、とにかく面白くない学問である、ということから始まる。

もちろん、そうは言つても「学問」だから、それなりの能書きはある、川島大先生曰く、「法現象の経験科学的分析と解釈の客観化によつて、市民への予測可能性を高めねばならない。また、某

マルクス主義法学者曰く、「資本主義体制下において、法はいわば矛盾の体系であり、その解明と止揚こそが法学者の任務だ。」(いずれも引用いいかげん)さらに、教室の元氣なA君曰く、「俺は司法試験を通り、弁護士になつて社会を変革してゆくのさ。……しかし、そういうお題目はともかく、僕たちが現実にはやらされることといつたら……60人の講堂に詰めこまれ、えらい先生の御高説を、一句もらさずウケタマワる。「民法第何条は何の規定?事件は?効果は?適用範囲は?解釈には、A説・B説・C説……」落ちこぼれのひがみに乗じてずいぶん書いているが、やはり法律学ほど、やつて虚しいというか、イライラする教科はないと思う。引用ついでにもう一つ、平野教授も言つてゐる。「学生のうちから法学が好きな女は気持ち悪い。」と、ここで本題へ返るわけだが、これは「文一の女の子なんて気持ち悪い」の心理と、直接つながつているように僕には感じられるのだ。

しかし、「好きな女は気持ち悪い」ならわかるが、女性の場合には、やつてゐるだけで「気持ち悪い」とくる。男ならコワイくないのに、女だとなぜコワイのか。へ女は自分達より能力があつてはいけない、とかへ女は家庭にいれられない、的々発想だという人がいて、それは僕もあると認めるけれど、ここではこういう風に考へてみた。特に法律学の場合、「つまらなくて、役に立つ」教科だからこんなことを考へるのかもしれないが、ここからは文一のことに限らない。

つまり、男性には、日本国家発展の担い手として、また、一家の命運を背負つて競争社会を生きぬいてゆくマイホーム・パパとしての期待・要請があり、従つてそのように教育され、いわば、いやで

も勉強しなければならぬ、仕事をし給料を貰って帰ってこなければならぬのに対して、女性の方は、そんなことを無理にしないうことだ。俺達がヒイヒイ言わせられている、とは言わないまでも、何も好きこのんでいるわけではない。学問(勉強)→職業(仕事)の世界へ、彼女らは「好きこのんで」入ってくるように見える。(「好きこのんで」は、やらない自由があつてはじめて成立つものだから。) 文一の例でいえば彼女達は、「法学の好きな学生」だと思われ続けるから、おまけに小さい頃から「勉強する子らしい子」と言われ続けてきているから、進んで勉強しようなんて奴にはコンプレックスを感じざるをえない。男たちの「コワイ」「気持ち悪い」は、言ってみれば、当然だということになる。(実際「好きこのんで」るかという事は、多少疑問なのだが、それは置いておく。)

もっとも、女性が「自由だ、など」と言ったら、おしかりをこうむることは目に見えてくる。これは、「勉強」「成績」「出世」に圧迫される側から、そう感じられるということだけであつて、女性にも実際には、そこから解放されていても、へお嬢さん学校に入つて、勉強は教養程度に、あとはいい男性(しばしば学歴のある「有望な」男)をつかまえて、もうでなくとも、子供ができたならば事をやめて、養つて帰る夫を休ませてあげる、いわば「くつろぎの家庭を作る主婦」といった役割が要請されているとすれば、それは別に「自由」でも何でもないわけで、一定の役割構造の中に「無意識のうち」に、否応なく「送りこまれていること」においては、男もも女でも、たいして変わらぬと言えぬ。(一つの文が長すぎるのは判決文の影響か。) ただ、女性にとつては悪いことに、社会の与える「価値」は、男の作るものに結びついている。しかし、「男なら自己実現が可能だ」と単純に考えたりするのは、男側の宣伝文句に振り回されているとしか思えない。

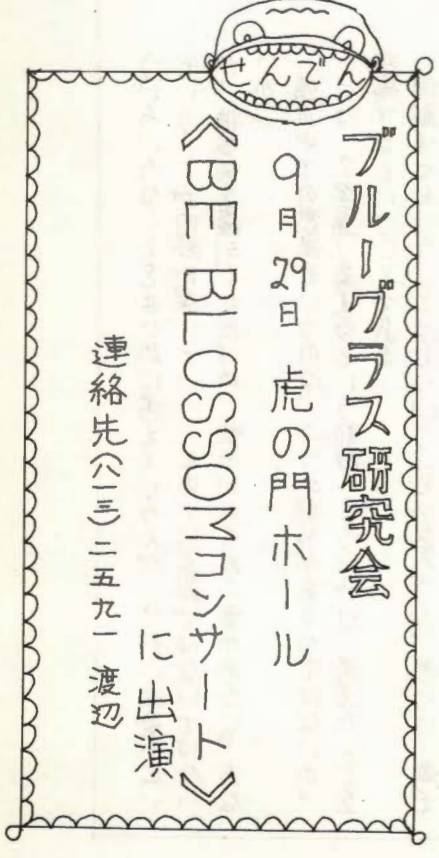
結局、「文一の女の子 or 女子東大生」(さらには「東大生」も)

「飛い」の裏には、男、女だけでなく、東大生だけでなく、社会全体が否応なく(少なくとも「好きこのんで」ではなく)教育され、職場や家庭の役割につけられてゆく、という、偉そうにいえば「疎外」的な状況が、(少なくとも一面)働いている、ということなのだ。が、はたしてどうだろうか。……

* 特集が出た折でもあり、一文ものして女の子の気をひこうなどと考へて書き始めたのだが、思わぬうちに独断と偏見と混乱の中につっこんでしまった。御免。

東大女子部の皆さん、結論はともかく、男どもにも悲しい定めがあるということ、わかつていただけましたか。学問→職業の世界は、男の世界なのかもしれないけれど、どうも男の世界も、僕の見るところ、大して魅力のある世界ではないようです。その中に浸りこんで「気持ち悪い」と言われながらも、注目されている貴方方が、これから何を創り出そうとするのか。(同じ向いは自分自身にも飛せられなければならぬのはもちろんですが、更衣室など観察してみたいと思っております。本文、末文、ともにシリ切れですが、こはひとまず、これにて。【3】

【78】E



ブルーグラス研究会

9月29日 虎の門ホール

『BE BLOSSOM』コンサート

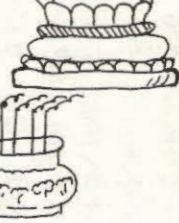
に出演

連絡先(ハニニ五九一渡辺)



時代錯誤家

恒河院僧越居士



なにか文章を書くことと思っても、どうも、すらすらとは、筆が進まない。いつもどう書き始めていいのかわからないでいる。やつのことでも書き始めても、途中で言葉がつかなくなる。なんという語彙の貧しさ。そして、貧弱な語彙をふりしぼって書き上げた文章を読み返して思うことは、どうして、こんな内容のないつまらない文章しか書けないのだろうかということだ。

書く事と

考える事

時代錯誤社の他のメンバーは、自分の考へなり、意見なりを、つかつかに文章にしてゆく。豊富な語彙と、論理的にしっかりと見事な展開。どうしてこうもちがうのだ。文章を書くというとはどういうことなのだろう。

人は、考えることのできる唯一の動物であるそうなの。というの人は、人だけが、言葉を持ってゐるからだそうなの。とすれば、考えるという作業は、言葉を必ず媒介してゐるということになる。ということとは、文章を書くという作業は、一種の思考作業ということになるのではないか。狭い語彙、つまり思考の狭さ、軽薄さ、ということになる。(いやだ、そんなことは認めたくない。けつこ

ういろいろなことをまじめに考えてゐるんだ。それに語彙が広いということか内容が深いということの十分条件ではないではないか。抽象語を羅列しただけの、訳のわからぬ文章があるじゃあないか。)

頭の中の思考というのは、二つの部分があるのではないか。一つは、文字通り考えるという部分、もう一つは、考えたことを理解するという部分である。

理解するということはどういうことであらうか。思うに、考えたことを、イメージ、具象物として、具体的な事柄として把握することではないか。だから、抽象語ばかりで構成された考へといふものは理解できないものなのよ。書くという作業の一つの目的は、自分の考へを理解できるかどうか試す場ではないか。

そして、もう一つ、書くことによって、頭の中で飛びまわっている思考を、定着させることができるのではないか。さうさうの方面へ発展してゆく。それをしぼりつけてまとめる作業が書くというこのよつだ。

よく考へ、よく理解するために、書く。まとめた文章を書きたいものだ。

(結局、文章がうまく書けないというのは考へが浅はかなことを暴露してゐるようなものだ。)

【寒】

コケムシ考

宇野はるか

コケムシという海棲動物がいて、彼らは古生代から運綿と生き続けたわけだが、この彼らの生態がなかなか興味深い。群生動物であり、そのために各個体が特殊発展している。例えばある個体は鳥頭体とかいって防衛用のみに発展していたり、ある個体には生命機能が何もなかったり、惑いは群生全体中で生きているのは外表だけで内側は死に絶えている場合もあるのだという。

ある時突然に気がついたのだが、我々は本当に隙も無くとり囲まれている。部屋を見回してみても、私は値段のついていない物が一つもないことにその時初めて気がついたのだ。(だまされたと思って周囲をど賢下さい。本当に、市場で買えないという物は無い。呼吸する空気でさえ、その空気の存在する土地には値段がついている。)しばらく考えてみて、やっと値段の付いていない物がみつかった。ごきぶり、蟻、雀といった彼らである。

しかし部屋の中、ごきぶりをみつけた時の生理的嫌悪感はどこに由来するのだろうか。もちろん、本能的に嫌いなのだという答え方もあるが、この嫌悪感にはもっと根探りものが感じられる。彼らがまさに値段がついていず、しかも自由に部屋の中を動き回っているからこそ我々は嫌悪を感じるのではないだろうか。道ごきぶりを見かけたところで、敢えて殺そうとする者はいない。或いは、ごきぶりが小さくて、自由に動き回らなかつたら、我々はまた彼らを耐えられると思われる。(ごきぶりへの嫌悪な大きな要素は、かなり大型の彼らが、あの素速で立ちまわちにしてものかげに隠れしてしまうことにある。)つまり、ごきぶりは我々にとって部屋(自分の領域)への侵入者として把握されているのだ。

値段をつける、とは一つの防衛作業でもある。

自分の領域を安泰にするための防衛として人間はまず物に名前をつけた。命名欲とは支配欲だろう。即ち、名前をつけてその物をこちら側の枠内におさめることによつてその物の未知性、異質性は薄められる。我々は安心することができると言える。(言い変えれば、「ヤバイお話などご「ナニ」とか「アレ」とか言うのは、その対象が我々にとつてまだ日常安心できるものではなく異質性を保っている、というわけだろう。)そして、我々をその物から防衛するためにはそれを支配せねばならない。値段をつける、とは貨幣に物を還元して、貨幣という一元的かつ普遍的なものによつて物を支配するということではないだろうか。

古代において、堅穴式住居のような所に住んでいた人々は、自分の住居にごきぶりや蟻を発見してもそれほど嫌悪はしなかつただろう。彼ら侵入者はまた出ていくであろうから。けれども、物の統制支配が進むにつれて、同時に支配する領域が明確になるにつれて、彼ら侵入者は叩きつぶすしかないものとなってくる。(我々の住居はどんどんと閉鎖的になってきている。ビルディングなどの、快適な冷房のある部屋では窓は閉鎖され、外界から風さえ吹き込むことはできない。)

物の統制支配は、名前や値段という枠を物にあてはめることによつて、或いは住居(自分の領域)を明確にすることによつて(即ち自分に枠をはめることによつて)、余計なはみだしを切捨てる。(これが合理化とか外化とよばれる過程ではないだろうか)そしてこの過程は、私にあるコケムシの話の思い出させる。物の統制支配という時「物」とは人間も含むのだから、人間が、余計な所を切捨てる

れることによつて、多々の個体が（コケムシのように）特殊發展していくことになる。

対象そのものが意識にとつて消え失せつつあるものとして示されてゐること……は対象の自己への還歸である。……ただ人間の抽象態、自己意識だけが主体にされるのであるから、物性はただ外化された自己意識でしかありえないわけである。

「マルクス・経哲草稿」

さきほど、名前をつける、値段をつける等の合理化は人間の防衛（＝支配）機能であるようだと思つたが、これらの合理化はつまりは自己意識が自らを限り（ナワバリを決めて）その中において「自己を自己に關係させる」作用なのだろう。

つまり、全これが説明のつく、安定した世界を得たいと望む時には認識する側である自己意識を絶対化するばいい。そうすれば、多々の物そのもの、対象それ自体の異質性は慣れられ、やがて消え失せる。秋々の日常生活とはこうした状態の中にある。

対象への枠決め、固定化とは自己意識の絶対化であり、自分のアイデンティティを確立するために、自我を安定させるために、対象を固定化してそれとの流動的な關係性を否定し、対象の差を同質化しようとする試みだと思われる。親和するにせよ敵対するにせよ大前提として対象の固定化を行なうのだ。敵対というかわり方では、枠組みによつて固定された対象とかかわることに変わりがないために異質性は薄められている。（我々はおそらく律体のしれないものに対しては攻撃もできないのではないかと気がする。おびえによる盲目的な破壊はむしろ自分の作る枠組みにとらえられてゐるのだと言へる。）あるいは親和關係にしても、枠内での対象をその限りにおいて承認するというレベルにとどまる。（例えば、パパート（ヘイト（隔離））。白人以下という枠内においてならば黒人を認める論理。「パパート」としてならば愛することもするだろう。）

「差異と差別は違ふ。差別は根本においてアイデンティティと結びついている。」——柄谷行人「ガイアボーグ」（東樹社刊）より。

ひとつの社会、国家が自らのアイデンティティの安定化のために「我々ぞない」人々の目に見える存在を必要とすることは、例えばナチスドイツにおけるユダヤ人（ヒトラーは、ユダヤ人を絶滅すべきかという問いに答えて、「そうではない。もうしたら我々は第2のユダヤを作る必要がある」と答えたという）、あるいは日本におけるさまざまな差別の問題、等、けつして我々が過去のこと、他所のこと」と逃れられないところに結びついている。そしてそれら差別の問題の一端は、我々の領域を決め、我々の安定を得るために他者が必要とされる、として把握できるだろう。ひとりひとりの人間自体を問題にせず、X人、Y大卒などの総称ワタクによつてくることが差別の特徴である。その時、差異は無視され同質性（アイデンティティ）が前提となつてゐるのだ。

さきほどのマルクスの文に戻つてほしい。あの文の中の「自己意識」とは単に個人のそれを指すのではない。自己（人間）という所に国家あるいは組織という言葉で、対象という所に「人間」を置いてみれば、あの文の持つ怖しさがわかってくる。

自己意識の絶対化は差異を同質化しようとする作用であり、対象は同質化する時「自己」へ還起し、「消え失せ」るのである。

値段のついた、つまり市場で大量に流通している日常的商品、は同質である。（スーパーマーケットに並ぶ同規格品の山を見ればいい。近頃ではじゃが芋なども、パックに入って同質化してゐる。）同質とはとりかえ可能であるということであり、「量」が問題になるということだ。貨幣がものの交換という実質を離れ、抽象的な量的存在として肥大化していくように、一般的な物も、質から量への転換がおこつてゆく。（マクドナルドハンバーガーや吉野屋といった画一的、同質的な食事は時間の短縮という量の問題として次第に拡大していく。たしかに便利ですけどね。）そしてたしかに、使

捨てば、その物がまた買えるからおこるのだから。

そして、我々自身が同質化する時、我々は量として存在することになる。

我々は、名前や値段をつけるという枠決めを、自分自身で行なっているわけではない。今まで行なわれてきたところの慣習を踏襲しているだけだ。我々はこのように全てのものに名前がつけられ、値段がつけられている日常生活をあたりまえなものとして受けとっている。それはつまり、我々の知らぬ間に世界を枠決め（合理化）してきたところのものが、我々自身をもその合理化に気づかぬほどまごにみごとに合理化していることではないだろうか？

ところでこの合理化が何故拡大するのか、あるいは丁史上「一貫して拡大しているのか……人間はコケムシのように一つの群体を形成せずにはおられぬ生物なのかもしれないとも思う。

（資本主義は労働を商品として（人間とその生活を商品として）成立しているらしい。そこでは人間が量として量られる。ファシズムはこの資本主義化が急激に行なわれた後発地域における怨念ではないかという気がする。例えば日本では、少なくとも皇道派青年将校たちは産業界―資本主義を憎悪していた。そして商品として分化された人間に對抗するように「一君万民」という平等性がスローガンとなった。けれども分化であろうと平等であろうと一貫して「同質性」が前提となっていることには変わりがない。それは、いわゆる「共産主義」の隔るワナでもありそうで、「万人の所有」と言う時その「万人」の抽象性は容易に国家という枠（言ってみれば共同幻想）に置き変わる危険性がある。）

今、我々は個の時代に生きていくような印象がある。連帯や共感といった言葉は「前時代的」感嘆としてしられられている。集団への不信が語られる。

たしかに、肩を組んでシニプレヒコールをあげれば連帯だ、同一感だ、というのは欺瞞にすぎない。けれども個的に生きていく我々は、肩を組んでこそいえないが実はより大きな同一枠の中の部品ではないのだろうか。小集団への不信、疑問とはむしろ小集団を他者として、大集団（我々感情）のアイデンティティのために必要な他者としてとらえているところから来るのではないだろうか。大集団、たとえば国家という枠に對抗するには同じような枠としての集団ではなく、新しい、異質性を基盤とした自由な連帯が必要なのだろう。けれども我々は「孤立を怖れて連帯もできない」状況にある。

関係性とはむしろマサツであり、痛みであるはずだ。各々の差異が前提とされそれら異質なものがかわり合うのであるから。しかし我々は「老成」し、ソフィステイケートされていく。我々自身が同質化するときかかわりはなめらかになる。自己閉鎖、とは他へ関くほどの異質性、個性が自分に無い、ということなのだろう。

我々は個の時代にあるような印象があるが、それは実は個的な量としての存在を言うのにすぎない。各々が分化するにしてもそれは組織の中でしか生きることのない「質」であり結局は同質性なのではないか。

コケムシの中にある個体はたしかに安全だし居心地は良いだろう。そして本来コケムシの幸福はここにあると言うのかも知れない。けれども組織が拡大し抽象化するにつれてコケムシの個体は鈍感になる。特に外部に對して。最後には死ぬまでに。

あるいは、ごきぶり。ごきぶりは、支配統制された清潔な領域の中で、値段もつかず自由に動き回るからこそ嫌悪されているはずだ。我々が値段を捨て、自由に動き回ろうとする時我々は清潔な社会から「ごきぶり」としてとらえられるのではないか……

このような枠にからめとられないための個々の異質性、あるいはそれを前提とした自由な関係性、連帯とはどうやったなら可能なのだろうか。

十把一絡に見ないで

「民青」「過激派」「原理」について

公卿鬼寿(くぎまうおとし)

前から繰り返し言われていることを再び書くようで、実に気恥しいのですが、しかし現在の状況を見てみると、やはりこのことについて筆を執らねばならない気がします。このことというのは、駒場全体で行なわれている人間の見方についてであり、僕にそのことに言及する資格があるかと問われると、非常に自信がありませんが、でも書かねばなりません。

皆さん、次のようなことを感じたことはありませんか。「あいフは民青だ」「あいフは青解だ」と我々が口にするときの差別的響きは一体何でしょう。まるで異星人のことを言っているようではありませんか。また「原理研に入ると、みんな顔が似て来る」と僕もそう思わないことはありませんが——そんな見方をする時の我々、どこ間違っていないでしょうか。我々もまた、所謂「レットテル貼り」と同じ誤りを犯していないでしょうか。

反対に、少し「政治的に」「問題意識的に」「自治意識に」「目醒めて」いると「自覚」している人たちへ私もその一人かも知れませんが、よく使う「一般学生」という言葉にもまた、自分とその「一般学生」を対置し区別しようという意識が働いているように思われます。

これらのことに、僕は、大げさですが、人間的な悲劇を感じずにはおられません。どうして皆そうやって壁を作り合うのでしょうか。何故、同じ人間として結び合うことができないのでしょうか。そうです。「同じ人間」です。他人のことをうけとめるときに、自分と「同じ人間」という意識の上に立つことは非常に大事なことに

ではないでしょうか。そしてできれば、人間を好きになろう。愛そうと務めること、それが必要な気がします。文I・文IIに雨後の蛙の如く存在する読書会では、「苦しめられている人」の立場に立つということがよく語られます。その時にその「苦しめられている人」が自分と同じ人間であり、その人たちともまた友人と同じように結び合っているという視点を失ったとしたり、非常に危険なことになるでしょう。というのは「苦しめられている人」という概念をある人々に押しつけることは、その人々を自分とは別の人間と見、下手をすれば自分を「救済者」と考えるような傲慢さを注いでしまうからです。

我々の世代にとつては、何が気恥しい言葉である「愛」。これこそが、まず第一に、今の我々に必要な気がします(ちよつと説教じみてきましたか、我慢して頂戴)。しかし、この「愛」が何故、今我々に欠けているのか、となると、これはまた難しい問題であり、非常に複雑なゆゑの原因が絡みあっているように思われます。けれど、少なくとも、次のことが言えると思います。

我々の世代は無力感の世代だと言われます。そして我々の抱えるこの無力感の背後には、激しい自己嫌悪が横たわっている様に思われます。自分を優れている——劣っているという観点でばかり見てもしまつような能力主義的な教育を成されてきた結果、我々は自分の欠点というものが目について仕方がない。いや調子のいいときには自分の美点はかり見えて、胸をはれるのです(ただし、その胸のほう方は非常に毛りよいような疑がしますが)。しかし、ふつと気づく

と、我々はおまりに欠点が多い、どうしようもない人間であるように見えて来る。

この自己嫌悪こそが「愛」の欠落を生み出す原因ではないでしょうか。自分を愛せない人間は他人をも愛せない、自己嫌悪を抱えた人間が他人のことも見るときにはまれるのは、「近親憎悪」か、「劣等感」ではないでしょうか。

しかし、人間には欠点があるのが当然であり、それは少しづつ直していけるものだ、という見方に立ってしまえば（それは決して簡単なことではありませんが）、自己嫌悪など非常に下りないものとなるでしょう。まず、自分を愛そうと努力することへ、自分を可愛がる、甘やかすというのとは違いますか）、それこそが大事な気がします。

この「愛」に伴って必要なことは、相手を理解することだと思えます。例えば、原理運動の実態を追ったルポなどを読むと、この原理運動に参加していく人たちの多くが非常に素直で、また真摯な青年であり、世の中のことで真剣に悩んでいたということが書かれています。僕などはこれを読んで、「原理」の人々に対する見方が変わったものでした。彼らも僕と同じ人間である、という認識ができたように思われます。

もちろん日本民主青年同盟東シ支部や東大原理研究会におかしなところがあつたらどしどし批判せねばならないでしょう。でも、そのときに忘れてはならないことは、彼らも自分と同じ人間であるということです。批判されねばならないのは「おかしなところ」、つまり、彼らの考え、作っている組織の体制等々であつて、「民権」「原理」「青解」「革マル」の人々の存在や本質ではない。皆本質は、同じ人間であることだと思えます。そういう視点を決つたり、自分に敵対する考え方のものは全て「抹殺」し、「撃滅」し、「爆破」してしまえ、ということにもなりかねません。所謂「一般学生」「一般大衆」がそのような方向に向かつたときが一番恐ろしい。そ

れはファッショへの道です。

経験的に言つて、自己嫌悪にとりえられている人間は、自分の中にももりがちなあります。他人に害を及ぼさうとしない点ではいかも知れないけれど、自分のことしか考えていないわけで、非常に利己主義的な行動をしがちです。そうやって自らに壁を作り、コミュニケーションを拒否するのですね。このような人間には他人は生き生きと与えらることは仲々できません。ましてや、人を愛することなど不可能に近いのではないうか。

我々は自分の枠を破らねばなりません。他人と関ううとしなければなりません。そういう姿勢がなければ、所謂「愛」も、他人を同じ人間としてうけとめることも有得ないのではないのでしょうか。このことを是非、駒場の皆さんに考えていただきたいのです。そしてその上で、もう一度、駒場の自治、あるいは東大のあり方、社会に繋がる様々な問題などをみつめ直して下されば、幸いです。

(53) (LII)

欄のCM

東大舞踏研

◎9月9日 於東工大 AM 9:00~

国公立大学 舞踏選手権大会

優勝決定!

◎10月10日 (体育の日)

<東部日本 モダン新人戦>

於:ハ王子工学院 AM 9:00~

中央指向考

コンポラリフト

今日、中央指向性を持ちながら地方に住んでいる人は幸福である。

入学以来初めての帰省に際し、わが田舎の僻地ぶりに改めて驚くと共に、鈍感な私の神経さえもチクリと刺した一抹の不安……地方人にとつて少なからぬ重要性を含まないコトであると思ひに自負する次第である。

その昔、都が京にありし時、万物は京にのみ通じた。あらゆる生活必需品は、ただひたすら京を拠点として動いていた。それゆえ、身をたてるには京指向を持たざるを得なかった……遠い平安の頃の話である。

一見華やかな京の都も、夜は盗賊の天国と化する。横非遣使は無効であり、一人小次郎持門が奮戦……小住NHKの見過ぎであろうか。さて、京には中央指向の人間がやはり昔も集った。そして彼らの一部が盗賊と化した時、最悪の事態が生じたのである。なぜなら中央指向性が排他性と同義となりうるからである。排他性とは、折に小れて自尊心ともなり、かつて自分の憧れた所、そして憧れつつある所を採殺することによつて快感を覚えるまでに至る。単なる私利私欲がどうさせたのだと見る向きもあろうが、彼らが京の空に対する愛着心を欠いていたことも事実かと思われる。彼らの行動は無軌道のあり、貴族と目れば容赦なく侵略していく。かつて夢みた天国を目のあたりにし、それを今や自らの手で破壊することによつて陶醉する。しかし彼らは決して異常人格者ではない、むしろ最

一般的だと言えるのだ。といつても私は、「侮辱は能する」などという陳腐なアフォリズムを得意になつて強辯するつもりはない。およそ人はすべて自虐的要素を隠し持っていると言いたいだけなのだ。

自虐的であればこそ、殊更に「太陽に向かつて」遅しくなどと讃歌に歌うのであり、しかもぞうした自虐性は世の秩序に対して著しく不都合であるからして、人類が住得の防衛本能からぞうしているのではあるまいか。

それは、さほどに荒れた京の都を去ろうとしなかった民人達も、なぜ望めぬ官位をあてにしてまで、またはいつ盗賊にやられるとも知れない商売をたよりにしてまでどまっていたのか。それもまた自虐性で説明がつくのかも知れない。……今や私は偉大なる日本の歴史を解釈するにあつた偉大なる先住方の実績に対し、本意ならずも、果敢にして超越なる挑戦をやつてのけた。しかしその是非はともかく、いやしくとも私自身この仮定を否定するだけの情報を持ちあわせない程の不勉強であるがゆえに、この文章はヒマ人の書きなぐった慰み物であるから、先号の今井さんではないが、つれづれなるままに「という私の心境を汲んでいたければそれで結構である（いや、歴史の仮定とは元来ぞうしたものであるはずなのかもしれない）。

ところで話を本題に戻すが、地方での民心はどうだったのだろうか。人々は自分の土地に住住できない、たとえその土地に愛着を持

ってはいても、中央指向からの開き直りである場合がほとんどであるからして（もちろん都に行ったこともなく、自分の土地しか知らぬような者はこの限りではないが）根本的には、誰もが中央指向的であったといえよう。しかるに現実には自分は「中央」にいない。そこで一種の焦燥感が生れ、それが彼をして生産的人間たらしめた。彼は自己の回りに「中央」を作ろうと焦るのである。しかし作ったものは大体が都へ行つてしまふからして、彼は永遠に浮かばれない。そして常に生産的であるために肝要なエネルギーを、いつの間にか喪失してしまふのである。

さて時は流れて現代になる。都は京から東京へと移る。大勢からして、今や中央指向は激減した。「地方」が「中央」の代りをすることがある程度可能になったから、もはや本物の「中央」も必要としなくなつたのである。物は東京を極すして仮の「中央」に集結する。人が住めばそこはもう「中央」である。人々は中央指向というノイローゼからようやく解放された。しかし日本全土に「中央」が普及したことによつて、それだけ多くの人々が自虐性を帯びたといふこともできるのである。

ところで、ノイローゼではないにしても、実に外面的、若死に中央指向を垂棄する人々が少なからず残つてゐる。彼ら自身を立てるには東京へ出るにこしたことはない。未だに盲信してゐる。それこそ何もない僻地の土地根性をこれほど物賣りかになり、コミユニケーションの発展した世の中なつてさえも大切に守りつづけてゐる人々なのだ。しかし彼らを愚弄することなかれ、不幸といふことなかれ。実に彼らは幸福なのである。中央指向だから、常に東京を見地元を見ない。それゆえ地元が仮の「中央」であることを知らぬ。だから常に生産的であらうと、どころがそればかりでなく、彼の生命を維持していく上で、仮中央と化した地元の物賣、コミュニケーションを存分に享受できる。……実に厚かましい生き方を本

人は全く気付くことなくやってのける。物賣のなかつた昔の地方人がうちやむところである。

ところが、それではとばかりに、それまで地元の専家だった人々が中央指向に転じようとしてもだめである。「住めば都」ということが彼の脳髓に刻みこまれてしまつた以上、生産的人格を維持することは極めて困難だからだ。彼は己れの肉を維持するために、必ずや地元の中央的性格に依存しなければならなくなり、その時にはかつて持っていた「地元り中央」の錯覚が必ずよみがえってくるのである。そして彼はそのジレンマに苦しみ、中央指向を田舎者根性として否定するという安易な方策によつて、遂には旧に復してしまふのだ。

それゆえ、先天的に中央指向性をもつた人、つまりはそれほどに単純なイデオロギーに身をまかせられる人は幸福なのである。

先日、我が母校において、ある教師がこゝろ私にうちあげた。「私はどうもね、中央指向、エリート意識が強すぎて……しかも、エリートになりきれない……そうして苦しんでいるという幼児性に最近やつと気付いてね、いい年して恥ずかしい……」

いふ先生、恥ずくことはない。あなたは現代人としては実に幸福な群衆に属してゐるのだ。イヤミでも有でもない。私達のように中央に出てきてしまつた者は、あなたがうらやましくたまらない。我々は皆、自虐という追いつめられた者のみか顯著に感ずる苦しみに、日夜さいなまれてゐるのであるからして。（小注、愚論をもちあそびて世を騒がす不逞の輩である）（54Ⅱ）

「女の子の論」と「恋愛論」

美術サークル
鎌田

裕

まず女の子のお話

①見た感じが「あついで」って女の子いろいろでしょ

コッテリした美人ちゅうのが

あれはいたげないね

おなじ美人でも、いかに「スズシイ」って女の子いろいろでしょ

ケラツとした美人ちゅうのが

あれは最高ですね

水色が抜がいいね、まっ赤とか黒なんのはイヤなので

②自信に描ちあふれてるって、すぐわかる女の子いろいろでしょ

こまっちゃうかね

そういう人にかぎって

わざとらしく「ジャキにふるまってるでしょ

つらいね

自信があるってこと自体はすごくいいことだし

自信があつて

それでいて「テンシシラマン」な女の子ってスバラシイ

そういう人って笑った時すぐわかる

あ、ノ、カワイイな、ピンとくるものなのです

③明るくない女の子っていろいろでしょ

いくら美人でも寂れちゃうんだよ

雰囲気のない人って好きになれません

人形じやら話にたらないものね

④いつも明るい女の子がフツと寂れた顔するときはあるでしょ

すくいいね

冗談かなんかなって

その子が微笑むでしょ、なんとろく寂れた顔で

そういうのを見ると最高にかワイイと思うのです

⑤理知的なヒトっていいですね

首飾のシヤーマはヒトっていいですね

肩の細いヒトっていいですね

髪の長いヒトっていいですね

素顔のヒトっていいですね

目もとのスズシイ人って最高ですよ

⑥まとめ

僕の理想の女性とは、まず「明るい」こと、次に「理知的」なこと、三番目に「美人」のこと、これも前述のようにスズシイ美人なのです。この三条件を備えたヒトを僕は、ふんしか知りません。ふんしりには僕の姉ですが。

次に「恋愛」のお話

①自分ってのは大切なんでよね

ほんの世の中で一番大切なんだよ
自分がキズつくなんてイヤ

だから恋になんてオボレたら たいへんなんだぜ
途中でほじけちゃうたら自分がキズつくだけだもんね
だから あーあーあーあーとムリだね なんて思ったら
さっさと自分からやめちゃう
ムリに相手の欠点をさがしてきて
自分を論理で説得しちゃう

恋はオボレテ キズついて なんて少しも得にならやせんのお
だからこの恋 アキラメテ
こういう考え方で ついこのまえまで持っていました。

②僕は素直じゃないから

好きなヒトにもたげがヒニクを言ってしまうのです
本当にキレイでない人にむかって

けん思ふこと、てよくあると思いませんか？
けん思ふこと、てよくあると思いませんか？

③本当に好きになると相手を裏縛したくなるんじゃないかな
相手の人格をみてめて

そのヒトの自由を尊重しなくちゃいけないのに
やっぱり利己的なのかね……じーく……。

と思ふこともよくあると思わんかい？

④自分にだってやりにやならんことが山ほどあるんだよね

女の子につきあってもオボレルム

適当に満足してればイヤな

恋はオボレルなんてバカか

客観的に見ればあれほどコックワイなことないぜ

なんて考え方もあるけど……
恋をしてる人間が客観的に自分を見るときなんてムリなお話

⑤相手に対してカッコよく見せたい

いい服を着て豪華なレストランでお食事するのは
結局は自分の虚栄心を表わそうとだけなのですよ。女、しかも
自然な自分を見せたくて と思いつつも

でもやっぱりカッコつけたい

と思ってしまうもので、なかなかムズカシイですよ

⑥本当は空気みたいな存在になりたいんだよね

そばにいれば安心 自由に息ができて 何のキガネもいらなくて
でもいれないとタイヘン
息ができな

なんてイヤ

以上、簡単にまとめさせて頂きました。実際のシーンアイなど理論で解析できるものなどはなく、どんなに頭の良い理学者であって解くことのできない難問なのであります。ですから上にあげた文章は、公理、定理などは全くかけ離れたもので、仮定、推論の域を出ません。しかし、ひとつヒントにならぬであろうことは、『恋する相手を尊重すること』と『恋する自分と自分の未来を尊重すること』との間に矛盾があるが『恋をする際のつらさになる』という点ではないでしょうか。なお女性の方で非常に頭にくられた人がいるかもしれませんが、筆者はただいま加齢的に『結婚は神聖（マリアージュ）な行為（マリアージュ）であり、（マリアージュ）であり、（マリアージュ）である』と、上条件にあつた女性の方は大カンゲーですから迷わずおこし下さい。万全の体勢でおまち申し上げております。

白昼夢

P女の異端兄の兄

大学に入って四カ月が過ぎた。小學生の頃豚肉のみそづけを分けた仲であるK君が、髪の毛を伸ばした変わり果てた姿で売っていたのが恒河沙だった。あのK君が売っている雑誌がまともなはずはないのだ。

……しかしこのくそ暑いのに原稿を書いてるとは何たる巡り合わせ。それにしてもK君は豚肉のみそづけのK君ではなかった。大学生活を直面目に考え、みずからミニコミ誌を作る位の覇気を持っていた。大学に来て何が楽しいか、昔の友が刮目すべき大きな人間になったのを見ること程楽しいことはない。しかし編纂者というのは恐ろしいもので、しつかり原稿の約束をさせられている。油断もすきもないじゃないか。

これぞと思う人と本音をぶつけ合うのは喜ぶがある。しかし自分の文才と疎からしてまともな文は書けそうにない。けれど残された道は笑ってごまかすか本音を吐くかである。

人間生きてられるのはどうせ何年位のものだろうから、有史以来の年月に比べたらほんの少しだ。我々は常にまわりの人々を見てキウキウ生きているから、一年遅れたと言っては悲しんでみたり、無事に上に行けるとそれだけでも喜んだりする。世の中さみしい人間が多くなった。そうやっていっているうちに大切なものを見落してはいないだろうか。つまりぬめ授業に義理をたて、勉強の目的を試験の点に置く。しかしかたがないじゃないか。これも進振りの定め、点を取らねば好きなどころへ行けない。学部へ行つてから自分の勉強をするよ。などと書いても考えてみたまえ、高校三年間の勉強を、大学へ行ったら本当の勉強ができるから、といつて犠牲にしたのは誰

だろう。もういいかげんに目を覚ませ。大体、好きでないことをやる程人生暇じゃないだろう。遅れようが遅れまいが、その一年、好きなものを精一杯やるべきなのだ。好きなものうちで、自分に合ったものを選べば最高さ。その為には自分からあれこれやらねばならないけれど、どうして授業と心申しなければならぬのだ。目まぐるしく変わる「お子様ランチ授業」にお付き合いしてたら、大学のお望みの「人材」が出来上がる仕掛けなのだよ。個性をもった大学生を、なんて言っていて、半面大教室に押し込めて教育を施す。結局は、隣の人と違っているように彼らは思っても、金魚鉢の金魚と同じ。お前もおれも赤い金魚。そして自由なんて思うほどもありはしない。僕は自分の学問は自分で作る覚悟がある。そして、日々の時間をつまらぬ雑事でつぶしてはならない。面白くない授業にはさっさと見切りをつけて、せいせい読書の時間を作ろう。つまらぬ授業はしばしば頭の働きを緩慢にする。

もしつまらぬ授業に出るなら、まわりの人の顔を見るがいい。ビろんとした眠そうな目で、板書を写す風景に出くわすはず。この昔ながらの作業が人間をだめにする。会う人毎に、相手の大学名を聞きたがり、自分のことを大学名と共にしか語れない。レッテル人間になり下がる。大したことじゃないと言おうが、他の人と自分の中身だけでつき合えず。「この紋所が目に入らぬか。みたいに、相手をいたすらにシラケさせる。人間終ありだ。はじめから他の人を見下しているのだから、友人ができないなんて愚痴をこぼすのは論外だ。女のことを男が理解していないと同じ位、男だって別の男のことを理解していない。これぞ、と思う友人に出会うまで、ひたすらに、忍耐強く、「どこに住んでるの? 下宿? 趣味は何?」なんてことをしなげりやならぬのだ。他の人が自分のことを理解してくれないのが基本。もし理解してくるなら稀にみる幸運と思おねはし。

僕は大学に入って人に対する謙虚さを失ったのじゃないか。

おわび と 訂正

本誌第4号の「他者の〈痛み〉を共感するということ」（岸本修）において言及された「S君の自殺」について、若干の誤りがありました。S君は自殺をはかったけれども、一命はかろうじてとりとめたとのことです。（よかった!）

また、編集部注の中で多少事実誤認があったこともあわせておわびします。

岸本修
& 編集部

紙に書いた問題が解けても、何一つ自分の置かれた状況を分析できず、流されているとしたら、学校で勉強を身につけてきたなどと言えるのだろうか。「授業に対する自分の態度」「女子東大生の問題点」なんていうのは、今まで紙の上で解いてきた思考力があれば、もっと前向きな答が出てよさそうなものだ。そういうことを考えてみると、他の大学の人々に比べて僕らの頭が悪くないと言えるのか。使いたい方よくない頭を悪い頭というのじゃないか。これは本当だ。今はもう働きに出ている友達なんかの話をきくと、本当によく考えていたりする。ああ、なんて甘いんだ、砂糖のように甘い。僕は知らないうちに砂糖菓子になっていくんじゃないか。

僕らというのは、何やかや言っても、受験戦争のおかげを被っているのだろうか。落ちた人より秀れているなんて言えやしないのだ。それなのにこうして学校に通っていられる。いいかげんに生きてなんかいたら、運悪くも落ちた人々に申し分けがない。現在の一瞬一瞬をそれこそ火花の如く生きたらならないと思う。

……などと自分に言ってみるこの頃である。（54 S II）

原稿大募集

恒河沙編集部ではみなさんの原稿を期待しています。なにも大上段に構えて正論を書く必要はありません。学生生活の中で考えた事、感じた事をピンピン送って下さい。今後、恒河沙では何号にもわたって同一のテーマを取扱っていきたいと思っています。バックナンバーの特集や記事についての批判や意見も大歓迎します。自分の文章が活字になるのも楽しいものですよ。

内容：記事に関する感想、編集方針に対する批評、創作、評論、映画批評、文芸批評、エッセー、書評等々何でも。

規定：400字詰原稿用紙使用（厳守）、枚数自由、誌上匿名可、連絡先明記

×リ：9月5日

宛先：〒176 練馬区練馬4-1-18 小山方 時代錯誤社

敬望

シラジエロ
=アントニオ監督

「不在」と「異和」の映像

宮口真司

この映画はTVですでに三、四度放映されているから、御覧になられた方も多い事であろうが、私もTVで三度、そして今回(七月)は、新宿アートビレッジで一度、計四度見ていることになる。もともとワイドスクリーンでもない上に、あの小さなアートビレッジのスクリーンのことであるから、案の定、テレビでの画面とアートビレッジで観た画面との間に大した差も感じなかった。

さて、何から論じたらよからう、などと改まって言うのも奇妙なのだが、私の頭には言葉よりも先ず、幾つかの印象的なショットが浮かんできて、しかも、そのショットの印象深さについて語ろうとする、一種失語状態におち入ってしまう。もともとこの映画には起承転結的構造がなくはないのだが、その起承転結的大スジには必ずしも関係あるとは言えないいくつかのエピソードを綴ったシーケンスが、実に印象深いのだ。例えは思いつくままに挙げてみると、笑えといつても笑いが笑いとならない、表情の完全に欠如したモデル達を前にして主人公が苛立つところ。公園で何かい被写体はないかとうろつきまわっている主人公の姿を収めたショット。そこで抱よろしあっている一組の男女を、気付かれぬように、ちよつと監視しつつもちよつと気取ったようなポーズで主人公が隠し撮りしてゆくところ。隠し撮りをしている主人公を見つけた女が、主人公のそばへ駆けよってきて、フィルムを返せと追ったあげく、もとの場所に戻ってみると、すでに相手の男が影もかたちもなくなってしまう。というところ。憎とう屋で背丈よりも丈の長い一本の二枚羽根フロペラを入手して、主人公が運ぼうとするところ。何気な

く撮った公園で抱よろする男女の写真の中の一枚に、偶然写しとられた、殺人事件の子兆——すなわち残みの中におぼろげにみえる白い顔と手とピストル——に気付いた主人公が、本当にこれはピストルを持った男が、抱よろし合っている男女をねらっているのだろうか、と、何度も何度もその写真を引き伸ばしてゆくところ(引伸ばしフロウアップ)。これは原題にもなっている)。同様に、再度公園でのフィルム断片を検証しているうちに、抱よろし合っていた男女が立ち去ったあとの誰もいなくなった公園の一角を写した写真の中に、今度はおぼろげに見える男(一組の男女の片割れ)の死体を発見し、引き伸しを重ねて行くところ。街で偶然にも女(さきの一組の男女の片割れ)を見つけて尾行する主人公が、横丁やビルの中をめぐりめぐっているうちに、小さなライフハウスにとびこんでしまい、そこで起こるちよつとした事件にまきこまれるところ。スピーカーの調子がいかにしている事に怒った演奏中のベースストが、スピーカーにベースギターをたたきつけて壊してしまい、その断片を観客の中になげ込んでみると、殺人的な断片の争奪戦が観客の間で始まり、何故かその断片が、たまたま女をさがしてライフハウスに飛び込んだ、ファンでもない主人公の手に渡ってしまうと、主人公は必死になってギターの断片を持って他の観客どもを振りまき、逃走し、ついには逃走に成功するのだが、あとでそのギター断片をポイと路上にすててしまう、すると通りかかった男が、何だこれはギターの断片を拾い上げて、またポイとすててしまう——というところ。写真に写っていた男の死体を夜中のうちに確認しに行つて

みると、確かにちゃんと死体があったのだが、数時間後の翌朝行つてみると、すでに死体は消失していた、というところ。そして、ラストシーケンス、非常に有名なシーンであるが、早朝の公園のテニスコートで、ラケットもテニスボールも無しに、顔中にぎぎついメイクアップをほどこした前衛劇の俳優らしい者たちが、無言で、テニスの仕合のバントマイムを演じ、それを傍観していた主人公も、ついには、そのバントマイムに参加してしまう、というところ。

こうして列挙してみると気付く事だが、この映画を観終つたあの、えも言われぬある種の感慨は、おそらくは、列挙してみた数シーケンスのかかえもつてゐるフレイキに基くものであり、更に言えば、そのフレイキは、名付けてみれば、「欠如」と「異和」という主観論的統一性によって各シーケンスがくくられてゐるが故に生まれきてゐるのではないか。言わば、あるべきところに何かが無いこと、或は、何も無いところに、あたかも何ものかがあるように振る舞うこと。そして、かかる「欠如」に対して、主人公が、いや我々が感じる、ある異和の集積。

例えば、モデル達の表情の欠如。真昼間の公園で、立ち木も何もない広々とした芝生の上で、初老の男と中年の女が抱き合つてゐるといふ、何らかの典型の欠如。フィルムを返せと追られた主人公が女に返したフィルムの中の像の欠如（未現像フィルムを、あたかも二人の映つたフィルムであるかのように、偽つて渡した）。フィルムを取り返した（と思つた）女が、もこの場所についてみると、相手の男がどこにもいないという、いるべき人物の欠如。街で偶然に発見した女を、いくらさがしても二度とはみつからぬ、という女の姿の欠如。何ものかが、主人公のスタジオをあらして、証拠品のネガやプリントをすべて持ち去つてしまつたあとの証拠品群の欠如。夜中には確かにあつたはずの男の死体が、翌朝消失してゐる、という欠如。

これら「あるべきはずのものがない」という欠如と表裏一体にな

つて、「なにもないのに、何かがあるように振る舞う」という、非在を存在へと反転する「振る舞い」が、やはり主観論的な、一本の柱となつてゐる。

例えば、表情を支える心的な基底のないままに表情を演じるモデル達。何も起こらぬ街の風景の中で、あたかも何かが起こつてゐるように振舞つて行く事を職業とする主人公のカメラマン。おそらくは、茂みに隠れてビートルを持つてゐた男とグルになつて殺人をたくらんでいたのであるう中年女が、愛憎の欠けたまま初老の男とあたかも恋入同志であるかのように演じるころ。ただのギターの柄を、まるで黄金か何かのように取り合う、ファンたち（日本でも同種の光景はよくある）。ファンでもないのに、ファンのように振るまつてしまつた主人公のカメラマン。何の役にもたぬ一本のフロペラに、丁度、これれたギターの柄にとりすがる観客たちと同様、奇妙にひきつけられてしまふ主人公。そして、これはあの印象的なラスト、テニスのバントマイムを演じる俳優たち、それにひかれ、やがて自らも参加してしまふ主人公。

こうした欠如は、当然、ある種の異和感を我々に抱かせるが、この欠如と異和は、シーケンス単位で表示されるのみならず、少くないカットに於いて、ワンカットのみでこの欠如と異和が表示されてゐる。みなさんは、この主人公のカメラマンの肉体の不特定の予測不可能な動きに気付かれたであろうか。部屋の中であれ、街の通りであれ、公園であれ、主人公だけが奇妙に動きまわる。特に、公園のところでは、主人公が点景を撮られていて、静的な風景と、主人公の写真家との間の、ある距離感か、点景であるが故に、かえつて強調される。風景と写真家との異和とでも言つておこうか。一ヶ所だけ主人公の主観アイで撮られた公園のカットがあつたが、誰もいない公園を、ゆつくり右、左と、カメラがもどりパンしたときなど、「誰もいない、誰もいない……」というつぶやきが、画面から聞こえてきこつた気がした。さらに、主人公のバストショットで、

はじめこちらを歩いてた主人公が、ふと振向く、カメラがすばやくハンフォーカスすると、主人公の肩越しに、木の間から遠くのビルの上か何かの広告板が見える、というところがあったのだが、私などは一瞬ハツとしてしまつた。これぞ正に風景論の風景と、という気がしたのだ。六〇年代後半に一時流行した風景論の風景とは、こんなのを言うのでしようね、松田政男さん。我々の心象風景に重なるというか、心的な琴線に触れるというか、とにかくこの風景的な異和は、この映画の中で随所に見られる傾向として注目しておいて良いのではないか。

少し先走つて、結論の一部に話が及んでしまつたのだが、私が「欠如」「欠如」と言い続けて来た、いわば「何か欠けてゐるな……」といった感覚は、この映画の中ではシーケンス単位でもカット単位でもあちらこちらにちりばめられてゐる。この映画を面白いと感じるか否かも、この又々の感覚を共有できるか否かにかかつてゐるのではないか。そして、この欠如や又々の周囲をかこんでゐる風景の異和、ライスハウスのエピソードや、ヌロペラのエピソードが示す、あるカタワ的、マジエへの執着なども、我々の心象に重なり得るものなのではないか。みなさんも己れのまわりの欠如と異和とを再検証されてはいかがだろうか。

とまで言つたところで、この映画には、がまんのならぬ説明的カットが一つ所ある、と言つておく。ラストカットなのだが、芝生の上に点景で存在している主人公が、テレビポートでもしたように、ふつと消滅してしまふ、という部分がある。これは私か先に述べた主観論的な統一性にいささかも抵触するものではないとはいへ、逆にあまりにとつてつけたように説明的な「欠如」の表現なのであつて、それまでのフィルムと抽象度に之らいい差が生じており、承服し難い。だが、この部分も、もしかすると、冒頭のタイトル部分と対をなしているのかもしれないと考へれば、かえつて、なかなかこつてあるわい、と感心すべきところなのかもしれない。このタイトル部

分は、ラストカットと同じく、タイトルバックを芝生にしているが、字の部分だけ芝生が欠如して（すなわち、字の部分か虫食いのように又々でいて）その又々の部分から、街の風景がちらちらとのぞく、といった手間のかつた技法を用いてゐる。頭のまわしすぎかもしれないと思ふが、こうしてタイトルとラストと両方で主観論的な説明的カットを入れておいて、その間に談話全体をサンディック采する、という構造を、この映画は持っているのかもしれない。（若松孝二がよく用ゐる技法である）もしそうだとすれば、この全く不毛な戯れを、かえつて賞賛したくもなつてくる。ま、どうでもよいことではあるが……。

(531111)

ハイライト VS チェリー

論 弾 第 2

- H: やはり何と言つてもハイライトは煙草の最高峰である。
- C: 何をめがすか。チェリーこそ最高の煙草だ。
- H: いや、ハイライトだ。第一にあのうまさで120円という安さ、学生・勤労者の煙草として最適である。
- C: ふん、安いだけじゃないか。それに比べ、わがチェリーの格調高き香りときたら……
- H: いや、あの香りはじくさい。それに比べ、ハイライトのあの汚れなき煙は若さの象徴である。
- C: 何を。貴様、老人を軽蔑する気が。
- H: いや、そうではない。老人もハイライトを吸えば若返るといふのだ。
- C: そんなメチャクチャなことがあるか。労務者煙草のくせに。
- H: 差別的発言は慎まれない。やはり煙草はハイライトである。
- C: いや、チェリーだ。

健康のため
吸いすぎに注意しましょう

自然の美へのアプローチ

いま、あちらこちらで、自然保護ということが、さかんに、叫ばれているようです。しかし、ほんとうの意味で、しっかりとした自然保護が、おこなわれているかどうかは、たいへん疑問です。

「自然がない」といふと、容易に言う人がいるようですが、多くの場合、それは、その人の観察不足であるようです。どんな都会にも必ず、小さな自然が生きているものです。しかし、それは、けつして、好しい状態にあるわけではないのです。ところが、小さな自然にさえ気がない人が、それが、好しい状態であるかどうかを知ることができのでしょうか。こういう人が、自然破壊の張本人になっているのではないのでしょうか。微かな自然を感じとれなければ、ほんとうの意味で、しっかりとした自然保護などできるはずはないではありませんか。

この『鳥と人間』の著者 W・H・ハドスンは、若い頃、ラ・アラタとパタゴニアで観察した鳥の二百二十六種のうち、十六年もたった後にも、二百十五種の鳥の姿を、彼がイギリスで毎日見なれたきわめて普通の種の鳥と同様、まちがいに、心にその姿を画くことができ、さらには、その叫び声、啼び声、歌声をきいた百九十種のうち、百五十四種の言葉を想い出すことができたといっています。また、E・ガーネットが序を言っているのによれば、ハドスンは、ロンドンのスズメで、ある一羽をじっくりと見てみると、それが二度目にやってきた時には、他のスズメすべてと区別がつけられたといっています。並の人では考えられない、実におどろくべき感覚です。しかし、一番大切なのは、このような能力ではなく、自然の美しさを見つけて出そうとする心なのです。あらゆるところに美を求め、す

べての美しいものを鑑賞の目をもって見る習慣なのです。

こういった考えが、ハドスンの鳥の観察にもよくあらわれています。それで、彼は、この本をけして、単なる鳥の生態調査報告におわらせるようなことはしていません。鳥を、人間的な興味と連想という媒体を通じて無理なく表わしています。鳥と人間、自然と人間を同等のものとしてとらえて、自然も人間も、けつして孤立したものではありませんということを示してくれています。

ハドスンのような心の持ち主ばかりなら、けつして自然保護がどうのこうのというようなことはなかつたでしょう。真の自然保護とは、一人一人が、自然の美しさを知ることから始まるのです。

「自然が無い」と嘆いている人は、是非、お説みになるといいです。

『鳥と人間』(W・H・ハドスン著 小林巖雄訳 講談社

一、三〇〇円)

著者について

ウィリアム・ヘンリー・ハドスン(一八四一年—一九二二年) アルゼンチンの首府ブエノス・アイレス近くで生れた。両親はアイルランド系。一八五七年急性腸炎、生涯の痼疾となる。六〇年兄より「種の起源」を示された。信心深い母の死。七五年渡英。七六年十五歳年長の歌手エミリー・ウィングレイと結婚。八〇年下宿屋開業。南英を歩き始める。九二年ラアラタの博物学者 R・ロード・ケレイを知る。野外博物学者としての地位定まる。一九〇〇年帰化。翌年『鳥と人間』。本格的なエッセイ集として認められ、文壇者ハドスンの名を確立した。ときに六十歳。

(「著者あとがき」より)

サークル 紹介

亀有

セツルメント

僕ら学生は大学でいったい何ぞ千年間学びつづけていくのだろうか？ 僕らのまわりでは、マスコミを通じ確かに「何か」が動いていっている。でも、僕らは、その「何か」とは無関係に、専門性を身につけさせられていく。ああ机上の学問の虚しさよ……

僕たち亀有セツルメントは、サークルの名前通り、東京の東のはずれの足立区の各地域で地域活動を通して、日夜、地域の人達との交流の中で、地域子供会や法律相談活動を実践しているサークルです。「地域」という言葉が示すように、極めて抽象的な言葉だが、逆に、あらゆる政治・文化・教育の「おおよそ人間の生活に関する事は全て対象」というのが、僕達亀有セツルメントです。

子供会での一例を紹介しよう。夏になれば山や海に行きたくなるのはどんな子供もそうである。ところが困った僕らが入っている閑原団地の子供の親は金がない（生活保護率は5割を越える）。キャンプに行きたいけど先だつものがない。子供達は、せせこましい団地の部屋から抜けだして、セカセカした生活から開放されたくてキャンプに行く事が本当に楽しみのようだった。

そこで、子供達は自分で金を稼ぐ事を考えついた。でも小学生でバイトなんてあるわけない。そんな事情で、閑原地域の一つの特色である廃品回収（それで生計を立てる人は実際多い。戦後、住む所もない引揚げ者、難民にとって、資本ナシでも始められる職としては実際こんなものしかなかったようだった。それが今でも続いている）を子供でやろうと考へ始めた。

子供にとつて、遊びは親に金を出してもらうのがあたり前になっているようだが、ここではそんな事は通用しない。実際、「自分で

金を稼ぐのも一つの社会勉強じゃないか」と思われる人もいるかもしれないが、「社会勉強」として、労働のまね事までできるのはやはり、余裕のある家庭の子供に出来る事だろう。子供達にとっては、本当に現実の問題だった。

じゃあ、ガメツク廃品回収やりまくったかといえはそれはかりじやない。すでに戦後30年もたち、立派に高い社会的地位を得ている家庭の子供も入ってくる。そうした子供はなかなかやりたがらない。又、生活保護家庭の子供でも、まだまだそんな自主性を持たず、廃品回収をやりたがらないで親にたよろうとする子供もいる。この問題は、子供達は、キャンプに行くための権利は、自分で稼ぐ奴しが行かせないという原則を自然とうちたて、見事に解決していった。そして、このキャンプは、「自分らで、準備したんだから、何も束縛されない」という権利を見事に確保していった。

子供の創造性なんて、実はこんな自分の生活に密着した所でつくられるんじゃないだろうか？ 又、見事なまでに、生保家庭の子供が、金持の子供らを統率していった事にも彼らの可能性をかいま見た気がする。

実践を通して、僕ら自身の物を見る目をきたえる事も僕ら亀有セツルメントの目的です。秋も近づき、じっくりと思考してみるのもやりやすくなる季節。「何かやってみたい」、そんなむきの人には、是非、地域子供会の子供達、法律相談でのおじさんおばさん達との接触をおすすめします。きっと、君達を、対等の仲間としてむかえてくれることだろう。

君の六法に血は通っているか？ 僕らは「法は誰のためにあるべきものかを考え、法の限界を捉え、地域の人たちや、そして僕らも真に展望ある生き方ができるような社会を考へていく。（法律相談部）

連絡先

浅川謙治 TEL(924)7223

ロシアのハロルド

迫田 英典

「知の悲劇」を追う者たち

19世紀後半から20世紀にかけて、世界文学の脊梁山脈となったロシア文学の、言わば専の出発点は、どこに措定すれば良いであろうか。

恐らくは、19世紀初頭の国民詩人プーシキンと後の後継者と言われるレール・モントフという二人の詩人の出現と、それに伴うロマ主義の高揚をもつて、その原点と解すれば十分であろうと思われる。それ以後ロシア文学は、世界文学という広大な地平に於いて、胎動と隆起の営みを終た後、遂に賑々たる近代世界文学の主座を占めるに至つたのであるが、そのロマ主義の高揚に大きく与かつて力あつたのは、一八二〇年代におけるバイロニズムの浸透であつた。ジョージ・ゴードン・バイロンという、英国の著名なロマ派詩人の名を冠して呼ばれるこの一種の「熱」は、一八一二年の「チャイルド・ハロルドの遍歴」の発表以来、英国一国内にとどまることなく、ドゥウアーを渡りヨーロッパを席卷して行つて、遂に当時の「文明の東端」ロシアにまで及んで強い影響を与えたのである。この影響のもとに、プーシキンとレール・モントフは小説というジャンルの中に極めて独創的な人物像を盛り込んだ。それは必然的に「バイロニズムの申し子」とならざるを得なかつたが、同時に後のロシア文学の先驅となる人物類型でもあつたのである。

私はこの小論の中で、バイロンの苦悩から筆を起こして、それが現実生活の中では単なる個人的内面的な苦悩から悲劇に変わらざるを得ないことを、プーシキンとレール・モントフの創出した二つの人間類型とこの悲劇から見てみたいと思う。それは近代知識人の苦悩

であり悲劇であつて、決して過去のものなどではなく、とりも直さず現代的な問題に他ならないからである。

I. バイロニズムの素描

バイロンとは、言わば近代知識人の苦悩の開祖なかもしれない。その憂鬱、嘆息、内省は、近代という世界史的に見れば極めて特殊な一時代の特有のものであると言つてよい。そこにバイロンという人物が、18世紀終盤から19世紀初頭にかけての「時代の象徴」視され、一つの宗教の開祖のように崇められる理由がある。そして、またそこに、広く伝播して普遍的に影響を及ぼす必然性があると言えぬ。

18世紀終盤から19世紀初頭という時代は、「近代」を生み落とすための、言わば「生みの苦しみ」を全西ヨーロッパが味わつた時代でもある。フランス革命やナポレオン戦争という物質的精神的衝撃に対しては誰も無関係ではあり得ず、不知不識裡に「内なる風波」を感せずにはいられない時代であつた。それがシラーやゲーテにおいては「疾風怒濤時代」の作品になり、ドラクローアにおいてはその雄渾な筆致として表出されたのである。

バイロンは、そうした時代に現われた、言わば新しい知識人として、苦悩するのであつた。

彼の事実上の出世作となつた「チャイルド・ハロルドの遍歴」の劈頭に置かれている、「チャイルド・ハロルドの告別」から印象的

な部分を引用してみた。この「遍歴」こそバイロンに、「ある朝目ざめると自分は有名になつていた」という名句を吐かせた程の人々の熱狂を呼んだ、記念碑的作品なのである。

「 (略) 」

『私を、命を惜しむものと見られるのですかチャイルド殿よ、私は弱者ではありません』

ただ誠ぶかいわが妻が、独りいて

その頬のいろの蒼さめめるのを思ふのです。

7

君の館ろかく、湖がめぐるあたり

愛しい妻と、愛しい子らが住みます

子らが、父の名を呼ぶとき

私の妻は、どのように答へるでしようか。

『よろしい、よろしい、わがよき従者よ』

おまへの悲しみを、咎めるものがあろうか

しかし、私のごとく心のかるいものは

笑いつつ故郷を去つてゆく。

8

妻の面、恋人の面にかがぶ

かりそめの嘆きを、誠と思ふものがあろうか

涙が落ちると見るひまもなく

新たな主^もに、その碧眼はかがやいてかわく、

過ぎた歎びを私は悲しまない

迫りくる福いも、悲しまない

わか最大の悲しみは、もはや何ものも

わが涙をささぐ力がないということだ。

9

ああ、この広い、かぎりなく広い海原のうそに

私は世にただひとりものとして

わがために泣くものもないときに

私もまた人のためには嘆くまい

(略)

ここに表われている感情は複雑であるが、まず全体を色彩しているのが、極めて雄渾な情調であることは否定できないであろう。故郷の岸辺を離れて旅立つ時、いたすらな感傷はすべて遠くへ押しやるうとするその誇らかな態度に、われわれは近代特有の強烈な自我意識を見ることが出来る。従者が妻や子のごとくに思いを巡らすのを聞いても、ハロルドのように「心のかるいものは、笑いつつ故郷を去つてゆく」、妻や恋人の涙もかりそめのものとして。

しかし、そうした英雄的な孤高の姿勢に常に悲壯感が漂うように、このハロルドの声音もまた哀調を帯びている。「世にただ一人のものとしている」と語るハロルドは、「私もまた人のためには嘆くまい」と言いつつも、自らの身にそくそくと迫る孤独の足音を、間違ひなく耳にしてゐるはずである。「妻の面、恋人の面にかがぶ、かりそめの嘆き」の誠実を疑いながらも、それを信じたと思つてゐるような二律背反的な、複雑な心情をわれわれは感じることが出来る。自我の意識に目ざめ、矜持を高く掲げることさえしなければ、すがりつくことのできる対象をあてて拒絶しようとする、その痛みに、ハロルドは苦悶する。

そして、「わか最大の悲しみは、もはや何ものも わが涙をささぐ力がないことだ」と告白せざるを得ないハロルドは、まさに近代知識人としての軀を負う者である。従者のように盲目的に、妻や子に対する、そして妻や子からの、愛情への素朴な信仰が可能であれば、別離に際して涙することは出来る。しかし、さうなるにはあま

りにハロルドには「知識」がありすぎる。彼には、そうした愛情や涙が真実でないのか、わかっているし、それらの虚偽が、見えてしまうのである。従って彼は何ものにも涙することができない。「不合理なるがゆえにわれ信ぜず」と言わねばならない近代知識人として、彼は「何ものもわが涙をさそう力がないということ」に「最大の悲しみ」を見出し、泣き止まらなないのであった。

こうした近代知識人なるがゆえの悲しみを詠ずることこそ、「バイロニズム」と呼ばれる一つの文芸思潮の真骨頂であったと言える。そしてそれは、啓蒙時代を経た後のヨーロッパにおいては、どこにおいても受容される性格のものであったと言えよう。

もう一つの例として、バイロンの戯曲「マンフレッド」を挙げてみたい。

このマンフレッドもまたハロルドと同様、強烈な自我の意識ゆえにのたうちまわったあげく、それに殉じた近代知識人として描かれる。

彼は言う。「青春の日々から 私の精神は衆人とともに歩まず私は人間の目をもって地上のものを見なかつた」と。人々を「呼吸する肉塊にすぎぬもの」と言い、「土塊で造られたアタムの子ら」と断じて、彼らと明瞭な一線を画せようとする自我は、ハロルド以上に、強く直轄的に表出してくる。そして激しい意志力で世界の神秘を窮めようとしたのであった。しかし、「手によつてではなく、心によつて」恋人アスターティの心を破壊したことによつてマンフレッドは苦悩し、自らの学問にも絶望的になつたあげくに「自己忘却」を求める。自らの自我意識ゆえの激烈な挑戦と、それによる不安や憂悶のための動搖は、ハロルドと同様に悲壯感を帯び、英雄的ですらある。それは、自我意識に自覚していない「かもしかの獵人」や、キリストを信じることのできる「僧院長」の内面には、決して立ち現われることのないはずのものであった。

そしてマンフレッドに死が訪れようとする時、彼は自分以外の何

者によつても殺されまい、救われまいとするのであった。僧院長の救いの手を拒絶して霊と相對する際、彼を殺そうとする霊に向かつて彼は絶叫する。

「似非の魔よ、嘘りにみちたものよ!

わが生の最後の時はきている——それは知っている。またその一瞬をも引きのばさうとは思わぬ。

私は「死」を敵としてたたかうものではない。ただなんじとぞのまわりの天使どもとたたかうのだ。

(略)

かくて、わが力の上に立って、——なんじに挑戦し、なんじを否定する——

汝らを追放し、侮蔑する——

「私はなんじにたぶらかされるものでない、なんじの飢食となるものでない——

私は自己自身の破壊者だったのであり、そして今後もそれであるのだ。——さがれ、挫折した悪魔らよ!

「死」の手は私の上におかれた——なんじらの手ではない!」

自らの死に際しても、他者のあらゆる介入を拒もうとするマンフレッドは、その誇り高い自我に殉じたのであった。

このように、作者の分身とも言うべきチャイルド・ハロルドやマンフレッドに仮託してバイロンが描いたものは、近代知識人の悲劇であった。それがバイロンの英国と比較してはるかに矛盾の多いロシアにその舞台を移し変えられたとき、その悲劇の内容は、個人の内面での苦悶といったものから、社会生活の中で浮遊し、存在感・充実感の喪失といった極めて現実的な形態をとるようになる。そうした典型的な人間類型として、フーシキンのオネーギンとレールモントフのペチョーリンが描かれたのであった。

今や、われわれはその19世紀初頭のロシアに立ち戻る必要がある

II、19世紀初頭のロシア

19世紀初頭のロシアとは、いかなる社会であったのか。それを語るためには、18世紀末の農奴制のことから始めなければならぬ。

18世紀末のロシアでは農奴制の發達が著しく、農民は事実上奴隷同様の状態に置かれていたという。地主に完全に生殺与奪の権が与えられていたわけで、売買や交換なども全く自由であった。そうした不合理な圧制のもとでは、当然のことながら下からの抵抗と、それに対処するための従前以上の上からの圧迫が表面化する。一七三三〜七五年までのフカチョーフの反乱は下からの抵抗の典型的な例であったし、その武力鎮圧や一七八三年に行なわれたウクライナへの農奴制の拡大は、上からの圧迫の顕著な証左に他ならなかった。こうした社会制度としての後進性を有しながらも、一七八九年に始まるフランスの大革命等に觸発されたような思想的先進性も徐々にあわせ持つようになる。18世紀末ロシアの不安定性を垣間見ることが出来る。そうした状況で、18世紀末の諸問題はそのまま留まらずに19世紀に持ち越され、不安定の度合いはいや増していくことになる。

そのような19世紀初頭のロシアに、二つの大きな波が打ち寄せてくる。一つはナポレオンであり、いま一つはバイロンであった。

一八一二年、ナポレオンは大挙してロシアに攻め込んだ。ロシアでは、この対ナポレオン戦争を「祖国戦争」と呼ぶが、この戦いは単なる軍事的勝利以上のものをロシアに与えた。そのうちの一つは民族意識と祖国愛の高揚であった。これは、直接的にロシアにロマニ主義を喚起する原因となった。そしてもう一つは、「西政の先進性」「祖国の後進性」ということを、西政に遠征した青年將校たちがはっきりと認識したことである。これは当時のロシア国内の知識人たちに、当時の社会体制「ツァーリズム」は変革せねばならないのだ

という意識を、薄々ではあるにしても種々つけたといえる。言わば知識人の目を社会的に開放させたのであり、文学においても、知識人を常に社会的な存在として描かざるを得ない状態になったと言えよう。

これらに加えて、I章で述べたような特徴を持つバイロンの波。こういったものを集大成する形で、フーシキンの「オネーギン」やレールモントフの「現代の英雄」が生まれたのであった。

その「オネーギン」や「現代の英雄」の中に描かれた人間類型とは、果たしてどのようなものなのか。いよいよ具体的な検討に入る必要がある。

III、オネーギンの悲劇

ロシアの国民詩人にして至宝と仰がれる、アレクサンドル・セルゲエヴィッチ・フーシキンの韻文小説「オネーギン」は作者24歳の年から7年以上もの歳月を費して、一八三三年に完成、出版された作品であった。これは19世紀におけるロシア文学の高揚の幕開けを告げる作品であったと同時に、この後に続いて、いわゆる「余計者の系譜」を形作る一連の作品の嚆矢となったものでもあった。

この作品と同名の主人公オネーギンは、当時の地主階級知識人を代表する人物として描かれている。

彼は、「まず最新流行の髪に刈り、ロンドンの伊達者どっくりの服を着て、待ちに待った社交界へと乗り出した」のであった。そして、「フランス語なら流暢に話もできれば手紙も書け、マズルカの足さばきも軽やかに、会釈のしぶりも自然だった」。また、彼は極めて博学でもあって、「ラテン語に」「ずいぶん明るいし」、「アダム・スミスを読んでいて、深奥なる経済学者になっていた」程だったのである。そのうえ「たわむれにおとめ心を驚ろかしたり、用意した絶望で脅かしたり、気持のいいお世辞で機嫌を取ったり、感

動の一瞬を捕えたり、うぶな警戒心を知恵と情熱で征服したり、自然な愛撫を待ち受けたリ、恋を打明けをせがんで求めたり」といった具合に、自由自在に女性の心を操って「ひたすらに恋に血道をあげ」ることのできるスレイホーイでもあり得た。

要するに、オネーギンとは、19世紀初頭のロシアにおける、上流階級の知識人の必須条件を完璧なまでに身につけた、一種の理想的な人間像であることにまず注意する必要がある。19世紀初頭のロシアの上流階級では、まだまだフランスを模倣した様々のことが行なわれていて、サロンクもまたその一つであったが、オネーギンのような人間は、そうした「サロンの花形」たるにふさわしい条件を完備した人物として描かれているのである。フランス語・詩・学問・恋と、行くところ能わざるは無く、雄弁でもあつて、「サロンク」に集まる多くの男女を魅了し得る——一種のヒーローであつた。

しかしながら、そうした寶篋を備えていながらオネーギンは「悲劇の主人公」といった役割を演じなければならぬ。「知識人」なればこそ、なまじ賢明であるからこそ体験せねばならなかつた悲劇——それは前述したハロルドやマンフレッドの悲劇と全く同根のものであるが、「現実の社会」という舞台上演じられるものの方が、当然のことながら非観念的で眞実味を帯びていると言ふよう。いま仮にそうした悲劇を「知の悲劇」と呼ぶことにしておきたい。ハロルドのように自由奔放な旅に出ることも、マンフレッドのように靈を呼び出して「自己忘却」を求めすることもできない、あくまで「現実社会」という一つの枠内で行動することを要求される知識人ゆへの悲劇を、そう呼んでおくことにするのである。

そうした「知の悲劇」のヴァリエーションは様々あつたが、それらに共通する「知の悲劇」の原型」でも言うべきものは、換言すれば、「見えてしまふ」ことによる自己萎縮に他ならない、と定義付けられよう。教養を身につけ、知識を蓄積していく過程で人は自我というものに目が開けて来、同時に自らの周囲の世界が秩序を

持った「コスモス」として、その全貌を明らかかなものにしてくる。その結果、自己についても、また周囲のもろもろの他者についても、客観的理性的で冷靜な見方——マンハイムの言葉使いで言へば「距離化」ということにならうか——が可能になってくる。與近な例で言へば、高台に上ることによつて街並や車の動きなどが、まるで自分とは別世界のもののように、しかし実際には平地に在る時よりは、かつと明瞭に、見えることにも例えられよう。要するに、万事が自分の目には「見えてしまふ」ことになるのである。こうなつてきた人間は、自らと自らの周囲について知りすぎたために、明瞭にその眞実の姿とその限界とを察知することになる。言い方を換えれば、まず何よりも先に「頭」で考えるようになる、と言つてもよいかもしれない。例へば何事かを為すに際しても、不幸にも「知性と教養」で獲得した見方、考へ方から、成功の可能性よりはそれを助けようとする数多くの困難に先に目が行きがちになるであらう。そして、その後に来るものは——主体性・積極性を失なつた、みじめな自己の内部でのみ無限に「知性と教養」を復唱して、それに写し出される自己の姿に陶然と見惚れていさう。外部に對する怨嗟とも、自己に對する慰撫ともつかぬ詠嘆を發するようになり、その度ごとに甚之縮んでいく。単純もしくは縮小再生産の果産には、自己萎縮しか残されてないのである。

これこそ「知の悲劇」の原型」に他ならない。知識ゆへの、生活からの充實感の欠落、そして鬱屈とでも言い直せるものである。「マンフレッド」の中に、印象的にそれはつづられている。

「悲しみは知恵である。もつとも多く知るものこそ

もつとも深く、致命的な眞實に心をいたためねばならぬ——
知恵の樹とは、生命の樹ではないのだ。

哲学と科学、または驚異の源泉とならざるまざまのもの
またはこの世界の英知の本体と

私は取り組んできたのであり、この心の中にはそれらを征服するに足る力もあった——だがそれらは空しかった。

(略)

——善——または悪——生命——

力、情熱——すべて私か他の存在のうちに見たものそれは私にとって、あの、絶対にいいあらわし得ぬ時からこのかた砂にふりそいで消える雨であった。私は戦慄を知らず呪いに縛られて、天地間のいかなる恐怖もまたす懼れや意欲に波うつ動悸のはためきも感せず

また地上のなにものかへの愛を秘めることもない。」すべてが「見えてしまう」のでなければ、まず「頭」で考え始める、というようなことのないのなら、「知の悲劇」の生じる余地はあるまい。第三者から見ることが「虚像」であるとしても、当事者が「実像」であると思っていれば、問題は起こらないはずである。しかし、当事者にそれが「虚像」であると「見えてしまう」と、悲劇が起こる原因になり得る。オネーギンもまた、この「見えてしまう」ことによる「悲劇の主人公」なのであった。

もう少しオネーギンの行動を跡付けて行ってみよう。「理想的な知識人であり、社交界の星でもあった彼は、しかし早々と見てとってしまふ。「社交界のざわめき」、「美女」、「不義の恋」、「友人も友情も」、「辛辣な警句」や、「喧嘩にも、サーベルにも、弾丸にも」飽きか来、物憂くなつて鼻について来たが、すべては彼が持ち前の明敏さによつてそれらの限界を察知したからであった。それらは自分が必要なことではないと悟つたからであるし、同時に自分を「距離化」してしまつた結果、それらの中に完全に没頭することが不可能になつたからでもあった。

彼は萎縮して行く。著述にも読書にも没頭できず、「小さな虫」になり切つてしまひそうになるのである。

しかし、彼にもさうした状況から抜け出す機会があった。叔父の遺産相続のため田舎へ隠遁した彼は、隣地の主の娘タチヤーナから思い切つた恋の告白を受けたのである。しかし彼は、この求愛を妹秋のよいうわべだけの言葉で拒絶して、自らその機会を手放した。その上、友人のレンスキイが恋している、タチヤーナの妹オリガを戯れ心から誘惑し、レンスキイと決闘することになつて彼を射殺してしまひ、遂にその土地を後にして放浪の旅に出るのである。

オネーギンは、ここまででは先に述べた「知の悲劇」の「祖型」の主人公そのままの感がある。そして、その自らの状況を何ら変革しようともせず、開明的進歩的思想を内に持ちながら、現実生活での自らの位置付けを明確化できない存在、いわゆる「余計者」、として描かれているのである。

その主体性の無い、疲労感に満ちてゐるような雰囲気は、われわれにもはつきりと伝わつて来よう。ハロルドやマンフレッドと同じ「病菌」に蝕まれたのではあつても、その「痲状」はずこぶる遠くでも言えようか。彼らがその「治癒」のために旅や「自己忘却」を求め、常に外向的であつたのに比して、オネーギンは、自己内部の無限軌道をいたすらに回り続けるのみで、ひたすら内向的に沈潜していくばかりであるかのごとくである。そしてそれが、この作品のここまでの部分から、悲劇特有のピリピリするような緊張感といつた類のものを奪つてゐることは否めまい。

恐らくそのことは、この作品のここまでの部分を薄墨色に覆う、オネーギンの「老い」と無関係ではあり得ない。あるいは正確には「老けてゐるふり」と言うべきかもしれない。決して年をとつてゐるわけではないオネーギンが、妙に老成してゐるような口ぶりやふるまいをするところが、作品中処々に出て来る。ちやうど落語の「横町の物知りの御隠居さん」的に、いやに悟り切つてゐるところが出て来るのである。

例へば、友人のレンスキイと会う時、常にオネーギンはこつ考之

ていたという。「東の間の彼の幸福を邪魔するのは愚かなことだ。僕が言わずとも、時が訪れよう。さしあたってはせいでいせいで、世界の完成を信じているがいい。若い情熱も若いうわ言も、若き日々の熱病と見のがさう」。

また、タチヤーナから恋文を届けられたオネーギンは、「思わずはっと胸きつかれ」、「楽しい、無邪気な夢に、心からふと浸りもした」にもかかわらず、庭で彼女と出会った時には、偽悪家の態度を取り続けて彼女の愛を拒絶したあげくに、こういう説教じみた話で結んだのである。「(略)若い娘は幾たびも軽はずみな夢想を変えて行くのです、春のめぐり来るたびに若木が青葉をつけ変えるように、それが天の定めです。ゆくゆくあなたはまだ恋をなさることでしょう。しかし……自分を抑える術を学びなさい。みんながみんな、僕みたいにあなたのお気持ちを理解するとは限りません。無経験はわざわざいの種になるのです」。

こういった「若い」の影が、この作品の二二までの部分を覆っているところに、オネーギン自身の内面の渺々たる寂寞にもかかわらず、この作品がどこかカドのこれた、ドラスティックでないものとなつてゐる理由があると思われる。そしてその「若い」は、先に「『知の悲劇』の相型」のところで述べた「自己萎縮」という覇気のない語感の言葉と、不思議に響き合うことは注目に値しよう。人間の生物学的な生命力をグラフで描けば、老年は単調減少とならうが、それは若い盛りを過ぎて成長が停止した後次第に萎縮して行くこと、奇妙に符合する。オネーギンという人物類型にとつて、この「若い」が、ハロルドヤマンフレッド、そして後述するペチョーリンに比して一種際だった特徴を付与してゐると言へよう。以上は、オネーギンの悲劇の「『知の悲劇』の相型」にあたる部分であった。しかしながら、「知性と教養」によつて万事を見てとり、積極的主体的試みを忘却して若いままに「老け込ん」で行くオネーギンは、確かに悲劇の知識人の一典型ではあるが、実は彼にと

つて、もう一つ別の悲劇があることを、急いで付け加えてみかねばならない。そのオネーギンにおける別の悲劇とは、先に述べた「『知の悲劇』の相型」の一つのヴァリエーションでもある。そしてこれは、オネーギンが放浪の旅に出た後、モスクワですでに入書となつてゐるタチヤーナと再会したところから始まった。

レンスキイを誤闘で殺した後、「目的もなく漫然と暮らし」、「何となく打ち込むことができずにいた」オネーギンは、「あてのない遍歴の旅にのぼつた」が、「やがて、旅もこの世の一切と同様に飽きか来て」都の夜会に顔を出したのである。そこで今は公爵夫人となつてゐるタチヤーナと出会つたのであった。彼は、以前とすつかり変わつてしまつた彼女に驚きながらも求愛するが、当然のごとく拒絶されたのである。以前なら、オネーギンの意向でいとも容易に得られたはずの彼女の愛が、今や得られない。そのためかつてはあれほど高尚にふるまつていた彼が、過去の自分を否定でもするかののごとく、彼女の前に身を投げ出しさするのであった。

二二に見られる悲劇の淵源は、オネーギンが実は「老け」てはいなかつたというところにある。先に、「老けてゐるふり」と書いたが、まさに「若い」を装つていたのである。タチヤーナへの思慕という若々しい感情を、無理やり「知性と教養」で抑え込み、隠蔽した時点でこつした悲劇は胚胎した。タチヤーナから求愛されたとき、憎からず思つていたのなら、変に偽装的に冷たく装ふ必要はなかつたはずである。それを妙に「理性的」であつたがゆえに愛情は結実せず、後に苦悶するハメになつたのである。

そしてその反動でもあるかのように、ヨリを戻さうとするオネーギンの態度は極めて「非理性的」でヒステリックですらある。妙に悟り切つた「御隠居さん」というかつての彼の趣は無く、純心で無垢だつたタチヤーナに「説教」した程の心の余裕も無い。理性という衣裝を脱ぎ捨てて自己懺悔をする、尾羽打ち枯らしたオネーギンは、彼自身の真の姿を現わしてこぞゐるものの、それは高き矜持

を保っている「知識人」のものではない。そこにあるのは「知の悲劇」の祖型」の一つのヴァリエーションとしての悲劇であり、「知識人」としての自意識を捨ててまで、何とか「知の悲劇」から逃避し克服・脱却とは異なる）しようとするところから生じる悲劇である。

彼は、タチヤマーナへ宛てた手紙の中で言う。「(略) ああ、恋の渴きに思い焦れながら、たえず理性で血潮の波立ちを静めねばならぬことがどんなに恐ろしいことか、あなたかご存知だったなら！あなたの際を抱き締めて、あなたの足下にむせび泣きつつ、哀願、告白、自責など、僕の言い表わすことのできる一切を残らず吐露したいと望みながら、いざとなると偽りの冷やかさで言葉も自差しも武装し、穏やかな会話を交わし、樂しげな目つきであなたを眺めなければならぬことがどんなに恐ろしいか、あなたがご存知だったなら！(略)」。これは紛れもなく欺北宣言である。「知識人」が、自らの「知性と教養」によって手痛い打撃を被ったという悲鳴に他ならないのである。

ここに至ってオネーギンの悲劇はようやくその全貌を明らかにすることになる。「知性と教養」による「自己善縮」を柳塗すため「老い」を装っても結局装い切れず、「知識人」としての精神的貴族性を放棄しつつ「自爆」する、という悲劇は、確かに「知の悲劇」の教あるヴァリエーションのうちの一典型と言えるであろう。

しかしながらオネーギンの悲劇は、自らの「知性に殉じた」亡口イックなそれではなかった。その意味からは、オネーギンは何とも哀れでみじめな存在であったし、その悲劇も茶番劇であったと言えなくはないであろう。しかし列な見方をすれば、そこにレールモントフが、オネーギンとは陽画と陰画の関係を為すような、パチョーリンという人物像を作り出す素地があったと言えらるのかも知れないのである。

次にわれわれは、そのパチョーリンという人物像を探る必要があ

る。パチョーリンとは、一体どういう人間類型なのであるか。

IV、パチョーリンの悲劇

オネーギンの「オネーギン」から選ばれること6年にして、ミハイル・ユリーエヴィッチ・レールモントフの小説「現代の英雄」が発表された。この作品の主人公パチョーリンも、オネーギン同様近代知識人の典型として描かれ、やはり「知の悲劇」の主人公であるのだが、オネーギンとは微妙な相違と類似を見せていて非常に興味深い人間類型であると言えよう。

パチョーリンもまた近代知識人特有の自覚から出発し、「知の悲劇」の祖型」を自らのものとしなければならなかった。オネーギンの場合と全く同様にすべてのことの限界を見とつてしまひ、退屈の殻の中に閉じ込められてしまふことになるのである。

彼は、「金で得られるほどの満足」と「社交界」、「
誦書や研究」と次から次へと体験してみが、すべてに満足できなかった。例えば学問についてはこう言う。「僕は、名誉だとか幸福だとかいうものは、学問には少しも関わりがないことを知りました。なぜなら、最も幸福な人間は——無学者だし、名誉は僥倖にはかならないし、そしてそれを得るためには、ただ要領のいい人間にさえなればいいのですからね」。そのうちに、「退屈の病」は以前にも増して彼を襲うようになって来たのであった。

しかしパチョーリンの場合オネーギンと大きく異なるのは、そういつた退屈さや「自己善縮」という「知の悲劇」の祖型」に対する嫌悪(あるいは、むしろ恐怖と呼ぶべきかもしれない)から、それを脱却しようとする痛々しいまでのあがきが感じられる点である。すなわち、彼は緊張の連続の中に自らの「生」を見出し出そうとする態度をとり続けるのである。例えば手記にこう書きつけている。「不断に緊張して、一瞥、一語の意味をもとらえ、計画を察知し、

陰謀を破り、計られたさまを装って、突如一撃のもとに、狡智と詭計から成立した複雑な一大建築物を覆すこと——これをこそ私は生活之名づけるのである。

従つてオネーギンとは逆に、恋愛の場面では常に積極的にアフローチして行くペチョーリンの姿をわれわれは見出すことができる。エリザヴェート温泉で出会った公爵令嬢メリイに対して、未開のチユチエン人の娘ベーラに対してもさうである。

さうしたことは、退屈の中に、自らの身の上に住じようとする「知の悲劇」の匂いを敏感にもかぎ取つた彼の、言わば必死の抵抗なのであった。従つて彼には「若さ」が充満している。変に老成して悟り切つていふふりをしていたオネーギンに比して、いかにも覇気に満ちあふれていて、表面上は躍動感に富む生活ともなるのであった。その意味では、オネーギンよりむしろハロルドとの距離を感じさせない人間類型であることは確言できるであらうと思う。

しかし、さうしたペチョーリンの抵抗も、空しい結果に終わる。彼は「知の悲劇」を支服したのではなかつた。その原因は、やはりオネーギンと同様、自分の存在を社会的な意味において価値付けができなかつたところに、究極的には求められざるであらう。自らの退屈を紛らすための緊張を求めること、そのこと自体が自己目的化してしまふば、つかもつとする「真実」は、一つの緊張が終わるごとに先に逃げてしまひ、どこまで行つてもつかみ切れないことになる。緊張の連鎖の果敢に自らの確固たる存在の姿はなく、ちやうど「逃げ木」のように、それはペチョーリンから遠ざかつて行く。焦りから、また緊張の環を一つ鎖につないでみたところで状況の本質は全く変わらず、彼の心の空洞は埋め合はれる術もないのである。彼は、「知の悲劇」の祖型」の主人公ではなかつたが、それに由來する一つのヴァリエーションとしての悲劇の主人公となつた。

この作品の中で最大の部分をなす、「公爵令嬢メリイ」の章で、ペチョーリンの姿を追つてみたい。

彼は「悲劇好み」で「小説の主人公になること」を目的とする友人クルシユニーツキイが好意を寄せると令嬢メリイを綿密な計画のもとに彼から奪ひ、そのことを恨みに持つてペチョーリンを買ひつけようとする。クルシユニーツキイ一派を相手に、その陰謀を見抜いて逆襲し、クルシユニーツキイを決闘で倒し、遂に完全に掌中にしたメリイを今度はいとも簡単に放棄したのである。

多大な労苦をはらいながら獲得した。成果を、容易に捨て去つてしまふ感覚は尋常ではないが、ペチョーリンがこの「恋のサヤ」を初めて「ゲーム」だと考えていたとすれば、該当はつくであらう。実際彼にはいつもさうであつたように、この恋は初めからスリリングな「ゲーム」でしかなかつたのであり、それに伴つて生じた決闘すら、極めて緊張度の高い「ゲーム」に他ならなかつたのである。

クルシユニーツキイが令嬢メリイに好意を寄せ始めるころからペチョーリンの「恋」も始まるが、ペチョーリンは、直接的に彼女に突き動かされてというよりは、むしろクルシユニーツキイへの対抗意識から彼女の愛を獲得しようとし始めるのであった。それは、ペチョーリンがクルシユニーツキイの中に、自分と同様の「知識人」の鼻もちならぬ嫌悪感を催させる何かを見出し、たからでもあつた。何より、友人に対抗して恋人を競い合うことが彼の退屈を紛らしてくれような刺激を与えてくれさうに思つたからであらう。従つてペチョーリンの中には、メリイに対する真摯な恋愛感情というものは無いと言つて良い。例へば彼女に「心からの」愛を告白したとしても、彼の真の目的が彼女の愛でない限り、それはうつろなものである。「私は最早、単に幸福のみを求めたり、心が何かを強く熱烈に愛したい切望を感じたりするよいうな、精神生活の一時期を通過した者である——今や私は、ただ愛せられることだけを欲する、それも極めて少数の人によつて」といふような意識を持つ人間には、真摯な恋愛感情など無縁のも

のである。自らのためのみの恋愛を欲する者には。

動機から尋常でない恋愛が、奇妙な過程を経て悲劇的な結末に至るのは自明のことかも知れない。ペチョーリンは万事計算づくめでカルシニコニーツキイから除々にメリイを引き離し、次第次第に自分の方へ引き寄せる。時に彼を喜ばせておいたり、また時に悲嘆の底へ突き落したりしながら、彼の愚かしい道化師の演技を見ながらほくそえむ。しかし、その笑いこそ「恋の成就」という「結果」のためのものではなく、友人の敗北を目のあたりにしている現在の自分の快感という、言わば「途中」のための笑いに過ぎないのである。

友人を、決闘という最も興奮する「ゲーム」において「実力」で倒したペチョーリンは、しかし列れの言葉をメリイに告げる。「あなたも御自分で、わたしがあなたと結婚することの出来ないのかわかりでしょう。よし今はそれを御希望になつても、じぎ後悔なさるにきまっています。(略)あなたは、わたしがあなたの目の中で、極めこみじめな卑しい役目を演じていることを御存じでしょう。(略)あなたがわたしのことで、たとえどのような悪い意見をお持ちになろうとも、わたしはそれに服従します……全く、あなたの前へ出ると、わたしはなんて卑しいのでしょうか……これでは、よしあなたが私を愛して下すつても、これからは私を軽蔑なさるでしょう。どうじゃありませんか……?」。ここに見られる偽善的態度は、意外にもオネーギンがタチャーナに見せたそれとよく似ている。しかし、オネーギンとペチョーリンの相違は、オネーギンが再びタチャーナを愛することができたのに、ペチョーリンの方は、二度と再びメリイを愛することがなかったことである。それは、オネーギンが自分の素直な感情を「理性」で押し潰したのに対し、ペチョーリンの場合は、彼の感情そのものがメリイから離れていたからという相違による。ペチョーリンは、「知性」による退屈をふり払おうとして緊張の連続を自ら欲したのであるから、メリイとの恋愛も

その緊張の一つであつたのであり、熱が冷めて緊張度が緩めば、それは不用のものとして投げ捨てられる運命にあつたと言えよう。自分のその時々感情にたじて行動しながら自らが悲劇の淵に立たされるということば、オネーギンの場合とは全く正反対の性格の悲劇ではあるが、直接間接の相違こそあれ、それらが「知性」に起因するのであれば全く同工異曲なのである。

ペチョーリンの悲劇を語り終える前に、ぜひとも言及しておかねばならないのは、温泉場で彼と再会したヴェーラという女性である。彼女は、彼にとつて言わばマンフレッドにとつてのアスタティの「とき」「運命の女性」であつた。彼と彼女の関係は最後まで詳らかにされることはないが、ペチョーリンが「ゲーム」としてではなく、真摯な態度で臨み得る稀有な恋愛関係であつたことは事實である。そして今や人妻である彼女との成就し得ない恋の反動でもあつたかのように、彼はかりそめの恋や狂気じみた冒険に突っ走つようでもあつた。彼はヴェーラからの列れの置き手紙を読んですぐさま彼女の後を追うが、遂に追いつけず草の上に倒れて声をあげて泣く。普段の冷静さ、冷血さなど微塵も見せずに泣き続けたが、恐らくこうまで自分を露わにしたことは、彼の生涯においては最後だつたであろう。この後、彼の行状は拍車がかかったやうに、以前にもまして向こう見ずになつて行く。「幸福」という静的満足感を得る最後の可能性を失つたペチョーリンは、自暴自棄なまでに「動」の中に自らの「生」を見い出そうとするが、遂に最後まで見い出し得なかつたのである。ヴェーラという女性が、そのふるまいこそ運々タチャーナと同様、相思相愛の男性をより深い悲劇に突き落したとすれば、オネーギンの悲劇とペチョーリンの悲劇との間には、意外な親近性を指摘できるのではあまいか。

ペチョーリンは「知の悲劇」を克服しそれから脱却しようとして果たさず、遂にそれに殉じる。しかし、彼の試みた「克服」や「脱却」とは真のそれらではなく、実は単なる「自慰」にすぎなかつた。

彼は「自慰」に耽けり、あたら貴重な才能を浪費したのであった。「自慰」が快感を呼ぶものではあつても遂に生産的ではなく、必ず後に自己嫌悪と脱力感を伴ふように、彼は緊張という「自慰」を求め続けながら、結局悲劇の再生産しかできなかつたのである。オネーギンの場合とはバクトルの向きが正反対ではあるものの、やはり方向は同じであつたと言ふべきであらうか。所詮、「知の悲劇」という同一の被写体に対しての、陽画と陰画の関係でしかなかつたのである。

V. もう一つの「知の悲劇」

一八二五年のデカスリストの反乱は、ツァーリズムに対する最初の公然たる烽火であつた。しかし、あつてなく鎮圧されたもののそれは、心ある知識人に強い影響を及ぼしたはずである。18世紀以来の国内の矛盾は覆うべくもなく、その改良ないし改革は、当然のこゝとく知識人の使命と考とられようになつたであらう。

フーシキンとレールモントフの描いた二つの知識人像は、どういつ時代の知識人像であつた。どういつ「時代の要請」にもかかわらず、現実の社会生活から浮き上がり、勝れた才能をいたずらに埋もれさせていく二つの像を、デカスリストの仲間にも多くの知人を持つていたり、公然と皇帝に反逆するような詩を書いて憚らなかつたりしたこの二人の詩人は、「反面教師」として描いたのではなかつたらうか。「知識人は、覚醒せよ」と念じながら、彼らは書きつけたのではなかつたらうか。もちろん「革命」の煽動、といった目的でこれらを書いたのではなかつたであらうが、しかし、安逸な暮らしの中に倦眼を食つていた当時のロシア知識人たちに、警鐘を乱打したのではあつたはずである。

ツルゲーネフやゴンチャローフが「余計者の系譜」と呼ばれる作品を書き、「ナロードニキ」の運動が起つたものの、ロシアの社

会にはその後矛盾が堆積していき、長い陣痛の後に遂に、「ロシア革命」という一つの「破局」を産み落としたのであつた。フーシキンやレールモントフの叫びから半世紀以上もの間、ロシアの社会は本質的に変わらなかつたことになる。彼らの裏からの主張は、決して容易に十分世に受け入れられたわけではなかつたのである。

フーシキンとレールモントフは、それぞれ些細なことが原因の決闘で、若くして落命している。彼らの一生は、その終幕に象徴されるように波乱万丈で、チャイルド・ハロルドの精神を地で行く愁すらあつた。どうした自分たちの姿の、ある意味では写しでもある人物像を描きながら、その主張は十分には理解され得ず、決闘で志半ばにして倒れる——彼らが描いたものとは全く異つた意味ではあつても、ここにもやはり「知識人の悲劇」があるような気がしてならない。

完・終・了

End Ende

Fin Fine

(付記)

引用した部分は、それぞれ次の文献による。

「バイロン詩集」 阿部知三訳（新潮社）

フーシキン「オネーギン」 池田健太郎訳

レールモントフ「現代の英雄」 中村白葉訳（以上岩波文庫）

ただし、「現代の英雄」は、かなづかい・漢字を新しくして引用した。また、II章は、「ロシア文学史」（木村彰一・北垣信行・池田健太郎 明治書院）によつた。

私の主張

学館拡大へ向けて

関口真哉

学館拡大の声が高まっている。そこで編集部では、前学館委員会議長で学友会学生理事會議長である関口真哉君に学館拡大について話を聞いた。

—何故「拡大」なのか。

「言うまでもないと思うが、実際サークル活動やっている人などは切実なのだ、なにしろサークル部屋がない。現学館は建ててからすでに15年もたつが、出来たときからすでにサークル部屋は不足していた。

ただ、「拡大」といっても、サークルボックスを増やせというだけではだめだ。一口にサークルといっても、その活動内容はさまざまだし、一概にサークルボックスというふうには考へることはできない。また、サークルをやっているのは駒場七千人のうちの二千入だ。七分の二のためだけに拡大要求するというだけでは説得力に欠ける。つまり、全学友に根ざした拡大運動を作っていかなければならないということだ。例えば、サークルに入っていない人でも、ロビーは利用する。学館ロビーに一度も来たことがない人というのはいないだろう。サークルボックスだけでなく、その辺も拡大する必要もある。また何か話し合いなどをしたいときに使う会議室などもそうだ。これも現学館にはらつきかない。何かしようとしても場所がなく、喫茶店などに行くしかないというのが現状だ。

また、これはサークルの問題だが、現学館には音楽練習室がない。音楽練習は周りに影響を及ぼすので、音楽系サークルだけの問題ではない。むしろ、うるさいからといって活動させないなどというのは論外だ。

—こうしたらロビー、会議室、音楽練習室かくまるほどある上での話

なら、一サークル一ボックス論も有効かもしれないが、現状では——拡大運動の経過と現状についてはどうか。

「細々とだが、現学館建設時から運動はあった。当時、現学館の7倍のものを要求していたのだが——当時は、今ある校舎もなかったものが多かったし、そう無理な要求ではなかった——容れられず、その反発が拡大運動となったわけだ。

今の運動の直接的発端は一昨年の秋に学友会と学館委員会が新学館をランを発表したことに始まる。その後、支持も得られ、情宣活動も始まった。当局は、「拡大の必要は認めるが、予算がないから……」と消極的だったのだが、自治会もその頃から「拡大」の言葉だけは出すようになった。そして昨年の春、学館拡大実行委員会へ（拡大委）が結成された。これは、学友会、学館委員会、自治会、生協、寮委員会の五者からなり、これに各団体が結集した。この拡大委が中心となって署名を集め、アピールを行ってきた。

今年の春の学部交渉で当局の姿勢にも変化が見られ積極的になってきたし、基本的には学生管理を認めると言っている。現在も学部側はこういう姿勢をとっている。また、拡大委は、今年の六月に、対文部省単独交渉を行なった。文部省は「建ててもよいが、学生管理には問題がある」ということだった。

—その「自主管理」についてももう少し説明を。

「この自主管理の点をあいまいにしていると、当局が管理する学館

になつてしまふ。今後の運動ではこの点を推し進めていかねばならない。なんでも建てばよいというものではない。単に建物の管理という問題ではなく大学の自治にかかわる問題で、この点を抜きにすることはできない。話は大学自治ということになる。

この大学自治は、東大闘争によつて得られたものだ。東大闘争は単に「ソートロッキスト暴力学生」(全共闘)VS「民主的」学生(民青系)という図式ではなく学生の大学自治への参加、大学自治、教授会自治であるという制約の打破としてとらえるべきだ。現在ではここで得たものが風化しつつある。そうした中で、学生が主人公である学館という施設の自主管理権を放棄することは、直接に大学自治の放棄へとつながることになる。」

——みるるへり要求を最後に。

「単に拡大のような現象面だけでなく、根本的なこと、つまり大学というものの自分の中で位置づけを行なつてほしい。というのはすべての運動はどこから始まりました、その辺を抜きにしては考えられないからだ。」

【まき手酔】

学館拡大の早期実現を!!

学生会館は、サークル活動、自治会活動など学生の自主活動の場として、学生にとってなくてはならないものである。しかし、現在の学生会館は、サークル部屋の極端な不足に象徴される如く、空間的な狭さは限度に達している。学生の自主活動が活発に行なわれるには、活動の場、学生会館の拡大は必要不可欠である。そこで、私達は大学当局及び政府文部省に、学生の自主管理を保障した上で、学生会館の早期大幅拡大を要求する。

時代錯誤社編集部

発刊に際して

駒場にたたまふと思ふ。自分は一体何なんだろう。何故ここにいるのか。駒場ってどんなところだろう。実はこんなあたり前のことを知らないままに我々一人一人は通りすぎている時に身を浮かべているのではないだろうか。

「自分が身を置いていられる場所を直視しよう。」ここから恒河沙は出発する。駒場を見つめ、その文化をたとえわずかなものでも、自分自身の基盤として大切に、ひいては駒場の文化を積極的に形成していこう。これが時代錯誤社に集まった我々の考えである。

もちろん、文化はそこで生活する我々一人一人が支えていくものであり、決して、政治的なアジェンダや、行動によつて作り得るものではない。それぞいて文化は、それらすべてを包摂し、溶け込ませてしまふ総体として存在する。一人一人のささやかな行動、それが実は文化の最大の担い手といえるだろう。

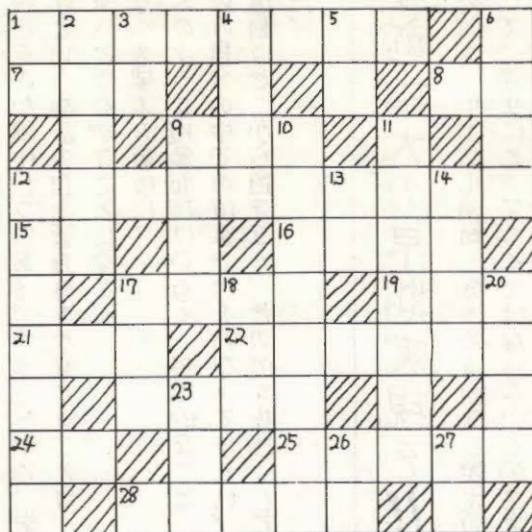
しかし現状を考えると、一部の党派や、大きなサークルを除いて、駒場にいる個人にはコミニケーションの手段が与えられていない。これでは充実した文化内容は維持出来ないのではないだろうか。恒河沙は駒場の文化を、ひいては、我々の時代の文化を最底辺から支えるものとして、無検閲・無修正を原則としてその紙面を広く公開し、コミニケーションの中から、新たな文化を建設していきたいと考えている。

(一九七九年一月)

○正解者の中から先着順に七名前に超豪華賞品が当たる♪

奇怪 クロスワードパズル No.6

1等 高級時計(1名)



2等 秋の味覚セット(1名)
3等 恒河沙7号(5名)

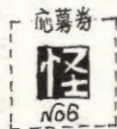
☆答を葉書に書いて9月5日までに下記宛(〆)にお送り下さい。
(〆)その際右下の応募券を必ず貼って下さい。

☆Across☆

- 1 モータリウムに確立すべきもの
- 7 摩周湖
- 8 ミつぞろい
- 9 一生独身だったおじさん
- 12 赤黄(青)緑青緑
- 15 場所
- 16 ヒトダマの仲間
- 17 インドの好きな音楽家
- 19 クリスマス
- 21 恒河沙は150円
- 22 めし有
- 23 稲刈
- 24 ドレミファ……
- 25 強すぎる鼻につきます
- 28 収穫を祝って

☆Down☆

- 1 瀬戸内寂徳
- 2 地租改正でいふとられた
- 3 躊躇
- 4 貸店舗、貸事務所
- 5 26番目
- 6 和洋折衷
- 9 子供の遊び
- 10 松野頼三
- 11 預金もこれなら有利
- 12 ダランベール
- 13 周辺機器
- 14 恒河沙の編集方針
- 15 国内に限ります
- 18 松井のおばさん
- 20 試験前
- 23 萌の部屋
- 26 雪
- 27 西武



宛先

〒176 練馬区練馬4-1-18 小山方 時代錯誤社

編集後記

我が社の恒河沙もどうか月刊ペースで発行できるように、月刊誌という名を冠しても不自然ではなくなったようです。これは、ひとえに愛読者の皆様の絶大なる御支援のおかげと申さずして過言ではありませんまい。

さて、月刊ペースの発行となると、かなりのハード・スケジュールとなり、妻子或いは夫子を養つていくために他の職業との掛け持ちを余儀なくされている社員を数多く抱える当社編集部では内容の検討が疎かになりがちで、編集会議、当社労働組合評議会を始めとする様々な場で、内容の再検討を強く求める声が上がっていました。そこで、編集部では、内容の再検討、ひいては今後の恒河沙の質の向上を図るべく、夏休みという長い期間（勿論、夏休みとは言え、社員の間には家族を養つたため、休んでいる暇などありませんが）を利用して合宿を組みました。ところが……です。これまで真赤な財政の都合上（今でも、ですが）慰安旅行などできようはずもなかった我が社の社員は、何を勘違いしたのか、真剣なる討論の場として設けられた合宿の第一夜のコンパにおいて、意図不明者数名を出す乱痴気騒ぎをやらかし、あとはお察

しのとあり……とは言え、流石に我が社の優秀な（！）社員だけあって、不充分さは否めないものの、短時間の討論で、ごまかし、ごまかし、今号の編集方針の決定までごまかせることができませんでした。ところで、読者の皆様は今号を読んで何か気づきませんでしたか？ 冒頭の記事を見て下さい。そうです、「今、再び東大を問う、第三部」です。私達は第四号からいわゆる「文学部問題」を継続的に取り上げていくという方針のもとに編集に取り組んできましたが、問題の大きさに気づき、「これは文学部だけの問題ではない、我ら自身の問題だ」という立場からタイトルの変更を行なった次第です。

これが、例の合宿の一つの大きな成果なのです。この企画は今後もずっと継続する予定です。この問題に関する読者の皆様の御意見を寄せ頂ければ幸いです。なお、私事で恐縮ですが、私は、あまりの重労働と低賃金のため家庭サーヴィスもままならず、昨晚ついに女房に逃げられました。私は、一歳にも満たない乳呑み子を抱え、貧困ゆえに保育所に頼るわけにもいかず、途方にくれております。ああ、どうしたらいいのでしょうか。では、皆様、お元気で

【挿】

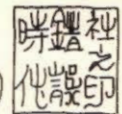
恒河沙 こうかしゃ No.6

定価百六拾圓

1979年9月1日発行(第一刷)

編集発行：時代錯誤社

(〒176 練馬区練馬4-1-18小山方)



印刷所：ギンショウ

ナマモノデスノデオ早目ニオ読ミ下サイ。

第3種郵便物不認可。乱丁落丁はお取り替之致します。

